２０１３年度　事業の概要

１調査と研究 …… 28
飛鳥藤原京の発掘調査 …… 28
平城京の発掘調査 …… 28
企画調整部の研究活動 …… 30
文化遺産部の研究活動 …… 30
●歴史研究室の調査と研究 …… 30
●建造物研究室の調査と研究 …… 31
●景観研究室の調査と研究 …… 31
●遺跡整備研究室の調査と研究 …… 32
埋蔵文化財センターの研究活動 …… 32
●保存修復科学研究室の調査と研究 …… 32
●環境考古学研究室の調査と研究 …… 33
●年代学研究室の調査と研究 …… 33
●遺跡・調査技術研究室の調査と研究 …… 34
国際学術交流 …… 34
●中国社会科学院考古研究所との共同研究 …… 34
●中国河南省文物考古研究院との共同研究 …… 35
●中国遼寧省文物考古研究所との共同研究 …… 35
●韓国国立文化財研究所との共同研究 …… 35
●西アジア諸国等の文化財修復保存協力事業 …… 35
●中央アジアにおける研究協力 …… 35
●ベトナム林業大学との共同研究 …… 36
●カンボジアにおける共同研究 …… 36
●ミャンマー考古・国立博物館局との技術移転・人材育成事業 …… 36
●コロンビア大学との研究交流 …… 36
海外からの主要訪問者一覧 …… 37
海外からの招聘者一覧 …… 38
研究者の海外渡航一覧 …… 39
公開講演会 …… 42
特別講演会（東京会場） …… 42
第112回公開講演会 …… 42
第113回公開講演会 …… 43
研究集会 …… 43
科学研究費等 …… 44
学会・研究会等の活動 …… 48
国が実施する事業等についての調査・協力 …… 49
●平城宮・京跡の整備 …… 49
●高松塚古墳壁画の保存修復のための材料調査 …… 49
●キトラ古墳に関する調査研究 …… 49
発掘調査現地説明会・見学会 …… 50

２ 研修・指導と教育 …… 51
文化財担当者研修と指導 …… 51
京都大学（大学院）との連携教育 …… 51
奈良女子大学（大学院）との連携教育 …… 51
奈良大学への教育協力 …… 51

３ 展示と公開 …… 53
飛鳥資料館の展示 …… 53
平城宮跡資料館の展示 …… 53
解説ボランティア事業 …… 54
図書資料・データベースの公開 …… 54

４ その他 …… 55
刊行物 …… 55
人事異動 …… 59
予算等 …… 61
職員一覧 …… 62

1 調査と研究

飛鳥藤原京の発掘調査

都城発掘調査部が、飛鳥・藤原地区において2013年度に実施した発掘調査は、藤原宮跡で１件、藤原京跡と飛鳥地域で６件である。また、立会調査は８件である。以下、主要な調査成果について概要を記す。

藤原宮跡では、朝堂院朝庭（第179次）の調査を実施した。2008年度以降、朝庭の整備状況や藤原宮造営過程の全容解明に向けた発掘調査に取組んでいる。これまでの調査結果から、朝庭は礫を敷きつめて整備され、そこには幢竿支柱と考えられる柱穴群や、排水用の暗渠等が設けられていたこと、また、礫敷広場下層には、藤原宮造営期の遺構が存在することが判明している。本年度の調査区は朝庭の東北部にあたり、第153次調査区の東・第160次調査区の南に面積1430㎡で設定し、礫敷広場での空間利用のあり方や礫敷下層における遺構の状況を確認することを主な目的とした。調査期間は2013年４月８日から５月28日、９月17日から2014年３月19日である。

藤原宮期の遺構としてはこれまでと同様に広場SH10800の礫敷、排水用の東西溝（礫詰暗渠）を検出した。暗渠は西側調査区から続くもので、さらに、東側へと延びる。また、礫敷上から掘り込まれた東西方向の柱列を検出した。柱穴は小規模であるが、長さは確認できたものでも53mにおよぶ。藤原宮造営期の遺構としては、これまでの調査で確認している運河を迂回させた斜行溝、大小複数の沼状遺構、東西溝を検出した。沼状遺構は、従来はひとつの大きなものと考えられていたが、今回の調査で複数の沼状遺構が隣接していることがあきらかとなった。沼状遺構相互の関係や全体としての性格については今後の課題であるが、朝庭の空間的利用や藤原宮の造営を考える上で貴重な手がかりを得た。

飛鳥地域では、甘樫丘東麓遺跡（第177次）の調査を実施した。今回の調査区は、これまで継続して調査してきた谷の東北に位置する。これまでの調査では７世紀から８世紀初頭にかけ、谷を大規模に造成し、谷の奥には石垣・建物・塀等を設けていたことや、尾根の中腹には柱列がめぐること、さらに、谷の入口付近には工房的な施設が存在した可能性が高く、場所により土地利用の様相が異なることが判明している。

今回の谷での調査は初めてとなるため、遺構の有無や甘樫丘東麓全体での土地利用のあり方の解明を目的とした。調査は2012年度から継続しており、2013年度の調査は６月３日から12月６日まで、面積は803㎡である。調査の結果、７世紀前半に谷の斜面を切土・盛土し、広い平坦面を造成し、建物を建てる等の土地利用がおこなわれていたことがあきらかとなった。主な遺構としては、２棟の掘立柱建物と、溝、炭溜、土坑群を検出した。掘立柱建物１棟は東西３間、南北３間の総柱建物で、柱間寸法は1.5m、北側と南側の１間は1.2mである。掘方は布掘りで、一部に直径0.2mの柱痕跡を残すものがある。建物の周囲には幅約1.0mの雨落溝と考えられる溝が確認された。もう１棟の掘立柱建物は、桁行３間、梁行２間で、柱間寸法は桁行1.8m、梁行1.5m、柱穴を５基検出した。遺構変遷は７世紀前半に谷の斜面を切土・盛土し、広い平坦面を造成し、建物２棟を造り、建物廃絶後に切土した地山の斜面裾に沿って溝を造る。さらに、この溝を埋め立て、平坦面に盛土を施し整地をし、土坑群が掘られる。土坑群のうち３基は南北長1.4～2.0m、東西長0.8m、深さ0.4～0.5mで長方形を呈する。これらの遺構は７世紀中頃をあまりくだらない時期に廃絶したとみられ、この谷は短い期間で利用されなくなったと考えられる。これまでの調査成果と合わせると、７世紀代の甘樫丘では広い範囲にわたり大規模な造成をともなう開発がなされていた可能性が高まった。

2013年度の発掘調査にともなって実施した現地説明会および現地見学会は以下の通りである。

飛鳥藤原第177次調査（甘樫丘東麓遺跡）
　現地見学会　2013年９月７日　大林　潤
飛鳥藤原第179次調査（藤原宮朝堂院朝庭）
　現地説明会　2013年12月21日　桑田訓也

平城京の発掘調査

都城発掘調査部が、平城地区で2013年度に実施した発掘調査は、平城宮跡で２件、平城京跡で15件である。また、立会調査は40件である。以下に主要な調査の概要を記す。

平城宮跡では、第一次大極殿院広場の調査を実施した（第520次）。調査面積は476㎡で、調査は2014年１月７日に開始し、３月18日に終了した。今回の調査では、奈良時代前半、後半、平安時代初期以降の３時期の遺構を検出した。主な遺構は奈良時代後半・平安時代初期以降のもので、礫敷広場、掘立柱建物、南北２列に並ぶ幢旗と推定されている遺構、凝灰岩の石敷列等を検出した。また、奈良時代前半の第一次大極殿院の礫敷や南北通路の西側溝を確認した。このうち奈良時代後半に位置づけられる幢旗遺構は、南北各列

４基、計８基が新たに検出された。この遺構の数と間隔は、『延喜式』にみえる、元日朝賀の際に立てる幢旗の記述と一致する。奈良時代後半の西宮において、重要な儀式に幢旗が用いられたことが考古学的に裏付けられた。

平城京内では、平城宮周辺と複数の寺院の調査を実施した。平城京左京三条一坊一・二・八坪の調査（第515次・第522次）は、国土交通省による平城宮跡展示館建設にともなう事前調査である。この調査は2010年度から継続されており、これまで主に一坪内でおこなわれてきた。今回の調査は、既調査区の東に隣接する西区と、八坪内の東区で実施された。調査は2013年５月16日から開始され、途中に中断をはさんで2014年３月28日に終了した。調査面積は2667㎡である。西区では、北方で奈良時代の掘立柱建物３棟、掘立柱塀１条が確認され、中央で坪内東西道路、南方で三条条間北小路とその南北両側溝の延長部分を検出する等、奈良時代の遺構面が比較的良好に遺存していた。また、南方では、古墳の周濠とみられる溝を確認した。東区では、弥生時代後期の溝を検出し、南区で検出した古墳とともに、平城京造営以前の土地利用の一端があきらかとなった。

興福寺西室の調査（第516次）は、興福寺の境内復原整備事業にともなう事前調査として、西室推定地の南半部を対象に実施した。調査面積は985㎡で、2013年６月３日に調査を開始し、10月11日に終了した。

調査の結果、西室大房の礎石、礎石抜取穴、基壇外装の一部を確認した。これにより建物規模がほぼ確定した。西室は礎石建物で、建物規模は南北62.54m（212尺）、東西11.8m（40尺）で、桁行10間、梁行４間である。柱間寸法は、桁行の南端２間分は4.72m（16尺）、以北が6.64m（22.5尺）等間、梁行は2.95m（10尺）等間に復元できる。建て替えの痕跡は認められないことから、再建の際にも創建当初の建物の位置と規模を踏襲していると考えられる。また、西室大房の西側に接して、桁行７間以上、梁行２間の掘立柱建物跡を検出した。これは、柱筋を西室と揃えており、小子房の可能性があるが、西室大房との距離が近いことや絵画資料との齟齬等問題を残す。

薬師寺十字廊の調査（第519次）は、薬師寺境内保存整備計画にもとづき、十字廊を対象に実施した。2013年９月17日に調査を開始し、2014年２月28日に終了した。調査面積は872㎡である。

調査の結果、十字廊の建物と基壇の規模がほぼ確定し、十字廊周辺の北方や東方の空間利用についても、新たな知見を得た。十字廊の基壇規模は、東西44.4m（150尺）、南北約21m（70尺）で、礎石建物である。建物は、東西廊が桁行11間、梁行１間、南北廊が桁行４間以上であることが判明した。十字廊の上部構造は、柱配置から、切妻造の屋根で本瓦葺であると考えられる。十字廊の遺構は一時期分のみで、これが奈良時代後半ごろの創建当初のものと考えられる。『薬師寺縁起』には再建の記述があるが、明確な建て替えの痕跡は確認されなかった。十字廊の廃絶年代は、基壇を壊す土坑群から出土した土器の年代から10世紀後半から11世紀ごろと考えられるが、検討の余地を残す。また、十字廊の東方に東小子房が存在し、この北側柱列が十字廊東西廊の南側柱列の延長線上に位置することが判明した。十字廊の北東では、東小子房の西妻から北にのびる南北塀や、十字廊の北方では参道と推定される石敷と、礎石建物を検出した。

西大寺旧境内の調査（第521次）は、マンション建設にともなう事前調査である。調査は、2013年12月３日に開始し、2014年２月７日に終了した。調査面積は460㎡である。調査の結果、西大寺弥勒金堂東方の金堂院東面回廊および東西の雨落溝を確認した。回廊基壇の幅は約10.6m。６間分の礎石抜取穴を検出した。また金堂院東方では、規模はあきらかではないものの、礎石建物の存在が確認された。これらは、昨年の調査（第505次）とあわせて、西大寺金堂院全体の配置を復元する上で重要な成果である。

この他の平城京内の調査では、法華寺阿弥陀浄土院の東隣の坪である平城京左京二条二坊十五坪の調査を実施した。調査の結果、奈良時代の遺構として、掘立柱建物６棟、掘立柱塀４条を検出し、室町時代後半の遺構として、数条の溝を検出した。奈良時代の遺構は部分的な検出だが、残存する柱材の大きさは平城宮内のものに匹敵し、三彩瓦が多数出土した。出土土器からは奈良時代前半期に大規模な建物群が展開していたことが予想される。また、室町時代後半の溝は、狭い範囲を縦横に巡らされ、出土遺物も多様で、周辺に集落が形成されていた可能性を示唆する。

2013年度の発掘調査にともなって実施した現地説明会および現地見学会は以下のとおりである。

平城第516次調査（興福寺西室）
　現地見学会　2013年９月28日　番　　光
平城第519次調査（薬師寺十字廊）
　現地説明会　2014年２月15日　庄田慎矢
平城第520次調査（平城宮第一次大極殿院）
　現地説明会　2014年３月８日　海野　聡

企画調整部の研究活動

企画調整部は、地方公共団体の埋蔵文化財発掘技術者をはじめとする文化財担当者に対する専門的な研修、研究所の調査研究成果や文化財に関する情報の発信、文化財情報の収集・発信システムの研究と情報の設備充実、国際的な文化財の調査や保護活用に関する協力・援助と学術交流あるいは研修、飛鳥資料館・平城宮跡資料館等における研究成果の展示公開と普及活動、以上のような事業を実施し、奈良文化財研究所がおこなう研究に係る様々な事業についての全体的・総合的な企画との調整、そして、事業成果の内外への情報発信や活用を担当している。

文化財担当者専門研修は、遺跡や遺物をはじめとする文化財の調査やその成果の整理と保存・活用に関する高度で専門的な研修を、年度ごとに計画を立案して実施している。2013年度は、東日本大震災の発生を受けて「災害痕跡調査課程」を実施したほか、「三次元計測課程」を新たにおこなった。今後も、地方公共団体からの要望や学術研究の進展に合わせて、研修内容の改良をおこなっていく予定である。

文化財情報電子化の研究では、遺跡データベースと報告書抄録データベースの構築に関する研究成果として、2012年度末に公表した『遺跡情報交換標準の研究第三版』について学会発表をおこなった。遺跡情報・遺構情報・遺物情報の収集管理や活用に関する情報収集は継続的に実施しており、各種データベースへのデータ入力・更新を日常的におこなっている。また、調査研究成果の電子化として、ガラス乾板・大判フィルム・35㎜スライドフィルム・遺構実測図・遺構カード等のデジタル化を進めている。

文化財保護に資する国際協力については、ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施する研修への協力事業として、2013年9から10月に実施された集団研修でアジア太平洋地域の16カ国から16名の研修生を招き、遺跡の保存に関する研修をおこなったほか、個人研修でキリバスから2名、バングラディシュから3名の研修生をそれぞれ招き、遺跡等の保存と活用についての実習をおこなった。

諸外国との国際共同研究としては、中国の社会科学院考古研究所、河南省文物考古研究所、遼寧省文物考古研究所との共同研究、韓国の国立文化財研究所との共同研究がある。1993年から継続しておこなっているカンボジアとの共同研究事業は、西トップ遺跡を対象にした調査と修復を実施しており、目下、南祠堂の解体修理を進めている。このほか、文化庁受託事業によるベトナム・ハノイ林業大学との拠点交流事業において、出土木材の保存に関する共同研究および研究交流を実施した。さらに、東京文化財研究所と共同で実施するミャンマー文化省との拠点交流事業では、ピュー文化の遺跡であるシュリクシェトラ遺跡を中心に共同研究および人材育成の事業をおこなった。

展示公開および普及については、飛鳥資料館での関係資料の研究とその成果の展示公開、平城宮跡資料館での宮跡調査の成果の展示公開等の事業を実施した。このうち、飛鳥資料館では、春期特別展「飛鳥寺2013」、秋期企画展「飛鳥・藤原京への道」、冬期企画展「飛鳥の考古学2013」を開催した。また、9月にはミニ企画展「日光男体山のかがやき―山岳信仰奉賽鏡の世界―」をおこない、冬期にはキトラ古墳壁画発見30周年を記念して、キトラ古墳壁画の白虎と玄武を特別公開した。平城宮跡資料館では、秋期特別展「地下の正倉院－木簡学ことはじめ－」と、春期企画展「発掘速報展　平城　2013」、夏期企画展「平城京どうぶつえん」を開催した。これらについては別項を参照されたい。

文化遺産部の研究活動

文化遺産部は、歴史研究室、建造物研究室、景観研究室、遺跡整備研究室を置き、それぞれが、「書跡資料・歴史資料」、「歴史的建造物・伝統的建造物群」、「文化的景観」、「遺跡・庭園」について、専門的かつ総合的な調査研究をおこなっている。

各研究室における調査研究の成果は、文化財の指定・登録・選定やその後の保存と活用に関する方策等、国の文化財保護行政にも大きく資するものとなっている。

●歴史研究室の調査と研究

歴史研究室では、日本を代表し、世界文化遺産に登録されるような古寺社が所蔵する書跡資料・歴史資料について、奈良を中心として、継続的な調査研究をおこなっている。また、古都の旧家等に伝来した歴史資料についても調査研究をしている。

2013年度は、興福寺・仁和寺・薬師寺・三仏寺・唐招提寺・氷室神社大宮家・東大寺や、奈良の旧家等が所蔵する歴史資料・書跡資料調査をおこなった。

興福寺調査は、『興福寺典籍文書目録』の続編を公表するための調査を続け、第117函・二条家第１函～

第６函の調書を作成した。写真は第106函・第109函を撮影した。

仁和寺調査は、『仁和寺史料 目録編〔稿〕』の続編公表のための調査として、御経蔵聖教第49～第57函の調書原本校正・写真撮影を実施した。

薬師寺調査は、第58函・第59函の調書作成と、第１函～第５函の目録校正、第25函の写真撮影を実施した。

三仏寺調査は、第６函・経典函等の調書を作成し、第５函～第６函の写真撮影を実施した。また、所蔵する神像の調査を実施した。

唐招提寺の調査では、宝蔵に所在する歴史資料の確認をおこなった。また、寛永８年（1631）～明治35年（1902）の、唐招提寺における授戒の全貌を記した史料を翻刻し、『唐招提寺授戒帳』として刊行した。

氷室神社大宮家文書は、春日大社の常住神殿守だった大宮家の元に集積された、中世・近世文書である。昨年度に引き続き奈良市教育委員会との間で連携研究をおこない、その調査成果を、『大宮家文書調査報告書』（奈良文化財研究所・奈良市教育委員会共編）として刊行した。そこには成巻文書の全体（第１巻～第25巻）・括文書の一部（第１括～第131括）の目録と、解説を掲載した。

東大寺所蔵の歴史資料の調査を、科学研究費補助金も充当して実施し、科学研究費補助金研究成果報告書を２冊刊行した。

さらに、奈良市佐紀町塚原家所蔵の歴史資料の調査を実施し、当該資料はその後、奈良文化財研究所に寄贈された。また、奈良市水郷所蔵の絵図・古文書を調査した。さらに、天理市の旧家が所蔵する、内山永久寺旧像扁額について、その調査結果を、吉川聡・鈴木智大・海野聡・赤田昌倫・児島大輔「内山永久寺の扁額」と題して、『奈良文化財研究所紀要2013』に報告した。

その他、調査協力の依頼を受けて、東大寺主催の東大寺経巻聖教調査等に協力した。

●建造物研究室の調査と研究

建造物研究室では、歴史的建造物、伝統的建造物群および近代和風建築等に関する調査研究をおこなうことにより、わが国の文化財建造物の保存・修復・活用に資する基礎データの蓄積を継続的におこなっている。また、古代建築の今後の保存と復原に資するため、古代建築の構造・技法について再検証するための調査研究を、現存建築のみならず、修理等の祭に保存された古材、発掘遺構・遺物等を研究対象として進めている。以下2013年度におこなった主な調査研究内容を紹介する。

古代建築に関する調査研究では、2009年度に始まった法隆寺所蔵の古材調査を継続して進めた。法隆寺が奈良県文化財保存事務所に委託した昭和修理に際し再用不能と判断され、法隆寺に別途保管されている部材の整理および収納に際し、当研究所が部材の実測、加工痕調査、写真撮影等をおこなった。2013年度までに金堂の旧部材の調査を概ね終了し、2014年度以降も調査を継続する予定である。

受託調査として、兵庫県近代和風建築総合調査、松阪長谷川家建築調査、塩尻市平出地区伝統的建造物群保存対策調査をおこなった。兵庫県近代和風建築総合調査は、兵庫県が2011年度からはじめた調査で、当研究所は主としてリストにあげられた個々の物件に関する実測、写真撮影、所見執筆等の２次調査を現地に赴いておこなった。松阪長谷川家建築調査は松阪市魚町に残る伊勢商人の本宅の建築調査である。建築そのものも上質であるが、江戸中期に居を構えてから周辺の地所を次々に買い足していった様子があきらかにできた。塩尻市平出地区伝統的建造物群保存対策調査は信州特有の本棟造民家の多く残る平出地区の保存に向けての調査である。以上３件は、いずれも報告書を刊行した。

海外との共同研究として中国文化遺産研究院、韓国国立文化財研究所とともに建築文化遺産に関する共同研究をおこなっており、2013年度は中国韓国から研究者を招いて奈文研で「集落町並みの調査、保存、活用」をテーマとした国際学術会議を開催した。

調査研究の一環として、奈文研所蔵資料のうち、建造物乾板写真の画像デジタル化と文化財建造物の修理時の復原等を主な内容とする現状変更説明資料の刊行を継続しておこなっている。2013年度に刊行した現状変更説明資料は1931～1949年度分である。

このほか、奈良県がおこなった近代化遺産総合調査に調査員として参加し、各地で実施されている文化財建造物保存修理事業、伝統的建造物群保存事業等について援助・助言をおこなった。

●景観研究室の調査と研究

景観研究室では、「文化的景観」を主な対象として、その概念および保存・活用のための基礎的・応用的な調査研究に取組んでいる。

特に2011年度からは諸外国との比較検討を視野に入れながら、文化的景観保護に係る基礎的情報の収集・整理・検討・公開を進めてきた。また、文化的景

観の具体的事例に関する取組としては、地方公共団体からの受託研究等を通じて、保護措置の諸問題について継続的に検討を重ねている。

2013年度は、従前の取組成果をふまえつつ、文化的景観の定着と保存・活用の促進等を図るため、研究者・地方公共団体担当者等によって構成した『「文化的景観学」検討会』において、広い視野から文化的景観の概念・調査・表現方法・計画・技術・制度等の体系化に向けた検討を進めてきた。また、文化的景観に関する情報・動向等の共有の場として2008年度以来例年実施してきた研究集会については、遺跡整備研究室と合同で『計画の意義と方法　～計画は何のために策定し、どのように実施するのか？～』をテーマに開催した。

諸外国との比較検討の観点からは、特に世界遺産における文化的景観（cultural landscape）に関わる諸資料等の調査研究を進め、日本の文化的景観保護施策に資するため日本語版資料の作成等に取り組んできた。また、2011年度のアメリカ合衆国での調査に引き続き、フランスにおける農業に関連する文化的景観の取組に関する調査を実施し、ヨーロッパやアジア各国の文化的景観に関わる取組について検討を進めた。

個別の文化的景観の調査・計画等に関する検討としては、岡崎（京都市）や相川（佐渡市）、長良川中流域（岐阜市）の文化的景観について、保存計画策定の検討や全欄図の制作をおこなうとともに、住民ワークショップ等の諸活動を通じ普及啓発についても協力した。また、重要文化的景観に選定されている「宇治の文化的景観」（宇治市）や「四万十川流域の文化的景観」（四万十市）の整備計画策定、或いは、阿蘇の文化的景観（熊本県）の調査等に関しても支援等をおこなっている。

●遺跡整備研究室の調査と研究

遺跡整備研究室では、記念物に関する総合的な調査と研究を実施しており、特に「遺跡等整備」および「庭園」に関する調査研究の２つを柱としている。

遺跡等整備については、国際的な動向も視野に入れながら、主として国内に所在する遺跡等の保存・活用およびそのための整備事業について、理念、計画・設計、技術に関する調査研究をおこなっている。

2011年度から継続して開催している「遺跡等マネジメント研究集会」については、2013年度は「計画の意義と方法」をテーマに設定し、景観研究室の文化的景観研究集会と合同で研究集会を開催した。遺跡を含む文化遺産の保存と活用に関する計画の役割、策定・運用の方法等について、講演・発表・討論等を通じて検討をおこなった。また、昨年度に開催した第２回研究集会「パブリックな存在としての遺跡・遺産」の報告書を刊行した。

庭園については、日本庭園の歴史および保護に関する調査研究、基礎的資料のデータベース化をおこなっている。

2011年度からは、中世庭園の研究を継続しており、2013年度は「室町時代の将軍の庭園」をテーマとして研究会を開催した。例年どおり、庭園史学・造園学だけでなく、考古学、建築史学、美術史学等の多分野の専門家が参加し、研究発表と討論を通じて関連分野における研究の進展状況が確認され、将軍邸の庭園の細部や理念について、共通する課題があきらかとなった。年度末には報告書を刊行した。

また、2012年度から奈良市教育委員会と連携研究の協定を結んで実施している「奈良市における庭園の悉皆的調査」については、2013年度から本格的に調査を開始した。宗教法人に対するアンケートを実施し、およそ300法人からの回答を得た。その成果に基づき、20以上の庭園の現地調査に赴き、所有者への聞き取りや写真撮影等をおこなった。

その他、2012昨年度に引き続きコロンビア大学との研究交流事業を実施した。

埋蔵文化財センターの研究活動

埋蔵文化財センターの４つの研究室は、それぞれの事業計画にしたがって、埋蔵文化財に関する調査・研究を実施するとともに、国や地方公共団体の要請に基づいて、専門的な助言や協力を行っている。平成25年度の各研究室の活動内容は、以下のとおりである。

●保存修復科学研究室の調査と研究

文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究および調査手法の研究・開発を推進するため、１）出土遺物等の材質構造調査、埋蔵環境調査および保存処理の開発研究、２）遺構の安定化法に関する基礎研究、３）文化財の非破壊材質構造調査法としてのミリ波およびテラヘルツ波の応用研究を実施している。

１）では①鉱物の標準ラマンスペクトルの集積と顔料、ガラスおよび石製遺物のラマンスペクトルの取得、②Ｘ線CT法およびＸ線CR法によるトンボ玉の製作技法の解明、③木造建造物の塗装彩色調査、④金属製遺物の埋蔵環境調査に取り組んだ。２）では①遺

構土壌における熱水分同時移動解析による土壌の適切な含水状態の維持、塩類析出抑制の環境条件、覆屋の仕様、埋め戻し保存法の検討等をおこなった。３）では、①サブミリ波イメージングによる絹本著色の掛軸の層構造に関する非破壊調査、②フレスコ画試験体の層構造の検出に関する核磁気共鳴法とテラヘルツ波分光イメージングの比較研究をおこなった。また、遺物の収蔵・展示環境に関する問題を検討するため、「文化財の収蔵・展示環境」をテーマとした研究集会を開催した。

受託事業として、元町石仏が彫刻された凝灰岩の不飽和水分移動特性に関する研究（大分市）、国史跡田熊石畑遺跡墓域整備にともなう環境調査（宗像市）、建中寺における文化財建造物の彩色塗装材料の調査研究（文建協）、史跡ガランドヤ古墳１号墳における熱・水分同時移動解析に関する研究（日田市）、陸前高田市立博物館所蔵骨角器抜本修復業務（陸前高田市）、大阪府安満宮山古墳出土品保存修理事業（文化庁）、ベトナム・出土木製品保存に関する拠点交流事業（文化庁）の７件を実施した。連携研究としては、クスノキ製臼保存処理に関する保存科学的研究（大分市）、潤地頭給遺跡出土準構造船の真空凍結乾燥法による保存研究（糸島市）、松平忠雄墓所出土品の保存処理に関する保存科学的研究（幸田町）の３件を実施した。

国宝高松塚古墳壁画の保存修復（文化庁）およびキトラ古墳壁画の保存修復（文化庁）において、劣化原因究明と修理のための材料調査をおこなった。また、高松塚古墳の石室石材をより安全に静置するための安定化支持具を製作し、取り付けをおこなった。

●環境考古学研究室の調査と研究

環境考古学研究室では、動物考古学を中心とした環境考古学の調査研究を実施し、国内外の発掘調査や整理、報告書作成の協力および助言をおこなっている。

今年度は、東日本大震災の復興事業にともなう発掘調査に対する支援を継続的におこなった。波怒棄館遺跡（宮城県）では迅速かつ効率的な発掘調査を可能にするために現地で作業を実施し、堂の前遺跡（岩手県）では出土した動物遺存体の整理作業をおこなった。復興関連以外では、六反田南遺跡（新潟県）、小竹貝塚（富山県）、内田貝塚（愛知県）、膳所城跡（滋賀県）、雲宮遺跡（京都府）、難波宮跡（大阪府）、東名遺跡（佐賀県）等から出土した動物遺存体の分析を実施し、報告書を執筆した。また、藤原宮朝堂院朝庭や平城宮跡東院地区、西大寺旧境内における古環境復元をおこなった。

富山県の小竹貝塚では55,439点の動物遺存体（縄文時代前期中葉～末葉）を分析し、遺跡至近に広がる汽水域～淡水域で狩猟や漁撈といった生業活動を中心とするとともに、富山湾に季節的に来遊したカマイルカの群れを対象とした漁撈活動を積極的におこなっていたことをあきらかにした。出土事例の少ない日本海側における動物利用の実態を知る上で貴重な資料群である。佐賀県の東名遺跡では魚類の耳石を同定し、現在の有明海に生息しないホンニベが含まれていることを指摘した。耳石から推定される体長が比較的揃っていることから、産卵期に河口に集まってきた個体を狙って漁獲していた可能性がある。また、体長２ｍ前後と推定される大型のホンニベの耳石も出土していた。

研究成果の発信として、日本動物考古学会、日本植生史学会、古代学研究会、日本中国考古学大会、Society for American Archaeology等の学会で発表をおこなった。社会還元や普及事業として、平城宮跡資料館、飛鳥資料館、神戸市埋蔵文化センター、中学生の職場体験、親子のための奈文研たんけんツアー等で、一般向けの企画展や講演をおこなった。また、収蔵する現生標本について、国内外からの標本調査に対応した。

●年代学研究室の調査と研究

年代学研究室では、年輪年代学により考古学・建築史学・美術史学・歴史学等、文化財に関わる諸分野に資するべく、木製文化財の調査・研究をおこなっている。対象は、出土遺物、建造物、美術工芸品等多岐にわたり、これらの年輪年代調査を実施するとともに、調査手法の研究開発にも取り組んでいる。とりわけ、当研究所で開発したマイクロフォーカスＸ線CTやデジタル画像による調査手法は、非破壊を原則とする文化財調査に有効であるため、調査対象の拡大と活用をはかっている。また、標準年輪曲線の拡充等年輪年代学に関する基礎研究のほか、木製文化財の樹種同定調査をおこなっている。

このうち、神奈川県伊勢原市・宝城坊本堂の解体修理工事にともなう同堂部材の調査では、年輪年代調査、および放射性炭素年代調査をあわせて実施した。放射性炭素年代調査は、樹種や年輪数が年輪年代調査に不向きな部材を対象とすることで、両調査がお互いに補完しあい、より精度の高い年代情報を多くの部材から得るためにおこなった。以上の調査により、現在の宝城坊本堂が鎌倉時代に遡る前身建物の部材を転用していることがほぼ確実となった。

このほかにも、法隆寺金堂古材調査、および薬師寺

東塔の解体修理にともなう調査では、年輪数が多く、部材表面でデジタル画像による非破壊年輪計測ができるそれぞれ100点以上の部材を可能な限り悉皆的に調査した。そして当初材だけでなく中近世の修理部材についても対象とし、それぞれの建造物の建立年代、および建立後の修理の経過を推定する資料を得ることを目的とした調査を進めている。

また、近年に出力の向上と高解像化のためデバイスを交換したマイクロフォーカスX線CT装置を活用し、木製文化財以外の対象についても調査をおこなっている。宮城県追戸横穴墓群A地区1号墓出土の斑点紋トンボ玉の調査では、全体に斑点紋を施した後に上端面側から下端面側に向かって芯棒を刺し込んだ孔を作出した可能性を指摘する成果が得られた。富山県小竹貝塚出土漆製品の調査では、漆製品の塗膜が少なくとも3層は塗り重ねられ、漆製品の破片に埋め込まれたタイの臼歯6点が、外表面に露出していないものも含めて全て球面を上部に配置していたことがあきらかとなった。

●遺跡・調査技術研究室の調査と研究

遺跡・調査技術研究室は、2006年4月の機構改編により、遺跡およびその調査法の研究と文化財の調査技術の開発・応用を主要な業務とする研究室として再出発した。過去に存在した集落遺跡、測量、発掘技術、遺跡調査技術、遺物調査技術の各研究室の伝統と蓄積を継承した研究の推進を目的としている。

本年度は、遺跡およびその調査法の領域では、古代の寺院と官衙関連遺跡、井戸遺構の資料の収集・整理を継続するとともに、遺跡の性格認定の指標や、発掘調査で抽出すべき基本的属性についての研究をおこなった。収集・補訂した寺院・官衙関係資料はデータベース化し、遺跡の性格や所在地、文献目録、主な遺構と遺物、建物等の詳細データと、地図や遺跡全体図、建物図面等の画像データを、奈良文化財研究所のホームページ上で公開している。また、都城発掘調査部と共同で、古代官衙・集落研究集会の報告書「塩の生産・流通と官衙・集落」と資料集「長舎と官衙の建物配置」「長舎遺構資料集成」を作成した。このほか、文化庁の委託を受けて昨年度に刊行した『発掘調査のてびき―各種遺跡調査編―』の市販に向けた作業を実施した。

文化財の調査技術の領域では、計測・測量、探査の各分野を中心に活動をおこなった。計測・測量分野では、三次元レーザースキャナーによる点群計測と処理に関して、文化財の特質にあわせた運用方法の検討や新たな写真計測法を導入し、精度の検証や試験的な計測を実施した。特に福島県の震災復興関連調査においてレーザースキャナー（いわき市専称寺、広野町桜田Ⅳ遺跡、南相馬市観音堂石仏、同椴木沢C遺跡、同横手古墳群ほか）と写真計測（南相馬市観音堂石仏、同椴木沢C遺跡、同横手古墳群ほか）を導入し、計測の精緻化と迅速化に成果を上げている。これ以外にも、平城宮東院庭園、東大寺、西大寺（以上、奈良県）等の調査で試験的に写真計測をおこない、効率化を図る機器の開発支援と試験を実施している。

探査分野では、各地の地方公共団体や大学と連携して、平城宮、東大寺（以上、奈良県）、鬼ノ岩屋古墳（大分県）等で各種手法の実践と改良をおこなった。

国際学術交流

奈良文化財研究所では、中国、韓国、カンボジアの3カ国の研究機関と以下の項目に述べるような学術共同研究を実施している。このほか、ベトナムやミャンマーに対して技術移転・人材育成に関する事業をおこなういっぽう、奈文研以外の機関がおこなう支援協力事業にも参加している。

●中国社会科学院考古研究所との共同研究

年間を通じて次期5カ年の共同研究にむけて、中国社会科学院考古研究所と連絡し、中国国家文物局に共同調査の許可申請手続きを継続したが、年度内には許可が下りなかったため、来年度以降も引き続き、許可申請を継続することとした。

8月には河南省洛陽市に所員4名を派遣し、北魏洛陽宮城の遺物整理作業と遺物調査を実施した。今回は主に出土の軒瓦の実測図、拓本作成および写真撮影をおこなった。あわせて今後の遺物整理作業について先方と協議するとともに、洛陽宮城大極殿の発掘調査現場を視察した。このほか、都城の比較研究として、四川省成都市における南北朝隋唐時代の関連遺跡、遺物の調査をおこなった。

9月には、所員6名を派遣し、黒龍江省に位置する渤海上京龍泉府遺跡、同省の金上京遺跡、内蒙古自治区の遼上京遺跡、同省の遼中京遺跡の踏査および出土遺物の調査をおこない、都城遺跡の比較研究に必要な資料収集を実施した。なお、この遼上京の視察では中国社会科学院考古研究所の協力を得た。

●中国河南省文物考古研究院との共同研究

当研究所と河南省文物考古研究院は、2010年３月16日締結の『友好共同研究議定書』第４条と『友好共同研究覚書（修訂）』の関連規定にもとづき、鞏義市黄冶・白河唐三彩窯跡の発掘出土品の整理、調査研究を共同で継続して実施してきた。

2013年度は共同研究第Ⅲ期５ヵ年計画の４年目にあたる。2002年から2004年にかけて発掘調査した鞏義市黄冶窯址出土資料の整理と、2005年から2007年にかけての鞏義市白河窯址出土資料の整理を進めた。あわせて、中国における唐三彩関連資料の調査を実施した。

2013年６月19日から22日まで、研究員２名を河南省文物研究院に派遣し、『鞏義黄冶窯』中国語版の刊行、および次期五カ年計画の策定に関する協議をおこない、河南省における関連資料の調査を実施した。また、2013年９月24日から９月29日まで、研究員３名を派遣し、河南省および四川省で関連資料の調査を実施した。このほか、10月30日から11月４日にかけて、研究員１名が中国古陶磁学会に参加した。

2013年10月24日から10月29日まで、河南省文物考古研究院は５名の研究者を派遣し、奈良文化財研究所を訪れ学術交流をおこなった。奈良、九州等で関連資料を見学したほか、日本の研究者と関連する課題について共同研究と討論をおこなった。

●中国遼寧省文物考古研究所との共同研究

2013年度の遼寧省文物考古研究所との共同研究は、５カ年計画で開始した「遼西地域の東晋十六国期都城文化の研究」の３年目である。

研究活動は、11月23日から30日の８日間、研究員４名を派遣して瀋陽市の遼寧省文物考古研究所と遼寧省博物館、北票市北票博物館、朝陽市北塔博物館、朝陽北塔において、関連する出土品や建造物の調査を実施した。さらに、北票市南西部の三官営子遺跡において踏査をおこない、崖面に露出する版築断面の状況や土器片等の出土状況を確認し、遼代の土器片等を表面採取した。

そして、遼寧省文物考古研究所において、金嶺寺遺跡出土瓦（３世紀～４世紀頃）および大板営子遺跡出土金属製品（３世紀頃）の実測・撮影等を実施した。また、2014年度の詳細な共同研究事業計画について協議し、調査日程等の調整をおこなった。ほかに、喇嘛洞遺跡出土品に関して、これまで蓄積してきた調査成果の公表についても、協議をおこなった。

年度末の３月18日から25日の８日間には、研究員４名を派遣し、金嶺寺遺跡出土瓦の実測・拓本・撮影、大板営子遺跡出土金属製品の実測・撮影をおこなった。主として、瓦は軒丸瓦を対象とし、金属製品は銅・金銅製品を対象として調査した。

その上で、金嶺寺遺跡出土瓦に関しては発掘調査時の出土位置等の記録について、大板営子遺跡に関しては出土人骨の性別鑑定について、有益な教示を得ることができた。

●韓国国立文化財研究所との共同研究

奈良文化財研究所と大韓民国国立文化財研究所とは2005年12月に研究交流協約書を締結し、共同研究を実施してきた。2013年度はその第３期の３年目にあたり、協約にもとづき「日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究」および相互派遣による発掘調査交流を実施した。

共同研究については、日韓双方の協議を経て設定した課題にもとづき、５回の派遣と３回の受け入れを実施した。研究成果は５カ年計画の最終年度にとりまとめる予定である。11月８から９日には、ソウルで中間成果発表会をおこない、共同研究の状況確認、課題の共有、討議をおこない、研究成果の質的向上をはかった。

発掘調査交流では奈文研より国立慶州文化財研究所へ研究員１名を派遣し、新羅王京遺跡等において共同発掘調査を実施した。派遣期間は約１カ月半であった。また、奈文研において国立慶州文化財研究所から研究員１名を受け入れ、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区、平城地区）において共同調査を実施した。受け入れ期間は約２ヵ月であった。

●西アジア諸国等の文化財修復保存協力事業

アフガニスタン、イラクおよび周辺諸国を対象として文化遺産保存修復協力に関わる事業を東京文化財研究所と共同で実施しているが、2013年度は、現地調査には参加せず、また、現地からの研修生受け入れは実施しなかった。12月にイタリアのオルヴィエートで開催されたユネスコ日本信託基金によるバーミヤーン遺跡保護専門家会議に参加した。この会議では、ドイツ隊が東大仏の足を復原した件について議論がおこなわれた。

●中央アジアにおける研究協力

11月29日から12月６日にユネスコ日本信託基金によるドキュメンテーションスタンダード研修の講師として、ウズベキスタンのユネスコタシケント事務所に

研究員１名を派遣した。データ標準と情報の相互利用に関する講義をおこなった。

東京文化財研究所がおこなう文化庁委託の文化遺産国際協力拠点交流事業によるキルギスでの研修「遺跡の発掘と出土遺物の保存修復と史跡整備に関する人材育成ワークショップ」が８月25日から９月12日に開催され、研究員１名が講師として参加した。国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所での講義とアク・ベシム遺跡現地での実習をおこなった。

●ベトナム林業大学との共同研究

本事業は、ベトナムにおいて出土する木製遺物を対象として、ベトナム林業大学を研究拠点にこれらの調査研究と保存処理に関する技術移転をおこない、出土木製品の研究・保存に係るベトナムの人材育成に資することを目的とする。2013年度は、ベトナムにおける現地調査とベトナム人研究者の招へいにより、①ベトナム出土木製遺物の樹種同定に係る共同実験と保存処理方法の検討、②出土木製品に関する国際研究会の開催と日本国内において出土した木製品の見学、③ベトナム全土において出土した木製品に関する調査と保存処理方法の検討をおこなった。

●カンボジアにおける共同研究

2013年度の西トップ遺跡調査・修復事業では、南祠堂下成基壇の解体、下成基壇内部とその周囲の発掘調査に重点を置いた。６月には第15次発掘調査をおこない、南祠堂下成基壇南側において南祠堂築造にともなう掘込地業を確認した。また、掘込地業外側から黒褐釉広口壺が正位に埋納された状態で検出された。解体作業は６月から下成基壇の解体を開始し、順次石材の取り外しをおこない年度中に完了した。７月に保存科学班が石材暴露試験の調査と基壇土の調査、10月には建築班による中央祠堂と南祠堂の取り付き部に関する調査をおこなった。また、12月にはアンコール遺跡国際調整員会へ出席し、関係者との調整を取った。３月には現地の若手研究者２名を招へいして日本で研修をおこなった。

●ミャンマー考古・国立博物館局との技術移転・人材育成事業

奈良文化財研究所は1994年度から1999年度にかけてミャンマーとの間で研究者の交流をおこない、都城遺跡や仏教遺跡等の研究をおこなうとともに、招へい者に対する考古研修をおこなってきた。長い中断はあったが、2012年度には、文化庁専門家交流事業として関係を復活させることができた。2013年度は、東京文化財研究所が受託した拠点交流事業の内、考古分野に関して再委託を受けた。７月に３名を派遣して予備調査をおこない、１月に研究員４名と外部の協力者１名を派遣して遺跡出土土器の実測方法や最新技術での測量方法の研修をおこなった。また、２月に３名を招へいして日本で研修をおこなった。

●コロンビア大学との研究交流

アメリカ合衆国ニューヨーク市所在のコロンビア大学中世日本研究所および建築・計画・保存大学院と交わした研究協力および交流に関する覚書にもとづき、2011年４月１日から５年間にわたり、研究者の交流等をおこなうものである。2013年度は、９月17日にコロンビア大学において講演会を共催し、海野聡研究員が “Research on Large Diameter and Long Logs Used to Maintain Important Cultural Buildings in Japan”、菊地淑人特別研究員（アソシエイトフェロー）が “*Matsuri* in Japan’s Historic Districts: Using Traditional Festivals as a Driver in Local Communities” を題目に講演し、意見交換をおこなった。また、５月27日から６月７日にかけて、コロンビア大学からのインターンを受入れ、木造建築修理現場の見学等をおこなった。

海外からの主要訪問者一覧

●イギリス／ロンドン大学東洋アフリカ研究所・教授 エリザベス・ムーア／13.4.5／ミャンマー考古学に関する情報交換
●アメリカ／ゲティ保存修復研究所 Jesse Latting／13.4.10／視察
●台湾／耿鳳英　他15名 台南国立芸術大学博物館学研究所／13.4.22／博物館学に関する調査
●アメリカ合衆国／カリフォルニア大学バークレー校 カール・ゲラート／13.5.30／視察
●アメリカ合衆国／コロンビア大学建築・計画・保存大学院　アシスタントディレクター Trisha Logan／13.5.27～6.7／コロンビア大学との共同研究によるインターンの受入
●アメリカ合衆国／コロンビア大学建築・計画・保存大学院生 Tianchi YANG／13.5.27～6.7／コロンビア大学との共同研究によるインターンの受入
●アメリカ合衆国／コロンビア大学建築・計画・保存大学院生 Jee Eun Ahn／13.5.27～6.7／コロンビア大学との共同研究によるインターンの受入
●アメリカ合衆国／University of Houston Jose L. Contreras Victal／13.6.10／16th International Graphonomics Society Conference エクスカーション
●アメリカ合衆国／University of Wisconsin-Milwaukee　Jinsung Wang／13.6.10／16th International Graphonomics Society Conference エクスカーション
●アメリカ合衆国／Louisiana State University Arend Van Gemmert　他1名／13.6.10／16th International Graphonomics Society Conference エクスカーション
●フランス／INSA Rennes / IRISA Eric Anqueh'P　他2名／13.6.10／16th International Graphonomics Society Conference エクスカーション
●イタリア／university of Salerno　Antonio Parziale　他2名／13.6.10／16th International Graphonomics Society Conference エクスカーション
●イギリス／Oxford Brooks University Anna Barnett　他3名／13.6.10／16th International Graphonomics Society Conference エクスカーション
●オランダ／Nymeger University Jda Bosga 他3名／13.6.10／16th International Graphonomics Society Conference エクスカーション
●ベトナム社会主義共和国／TUAT Phan Van Truyen　他1名／13.6.10／16th International Graphonomics Society Conference エクスカーション
●ベトナム社会主義共和国／Tokyo University of Agricalture and Technology Nauyen Tuan Cuong／13.6.10／16th International Graphonomics Society Conference エクスカーション
●イスラエル／Tel Aviv University Arie Shangs／13.6.10／16th International Graphonomics Society Conference エクスカーション
●中華人民共和国／Kyushu University Wenjie Cai／13.6.10／16th International Graphonomics Society Conference エクスカーション
●ドイツ／DFKI Andreas Dengel　他2名／13.6.10／16th International Graphonomics Society Conference エクスカーション
●ベトナム社会主義共和国／Tokyo University of Agricalture and Technology Nauyen Tuan Cuong／13.6.10／16th International Graphonomics Society Conference エクスカーション
●カナダ／Ecole Polytechnique de Montreal Rejean Palamondon 他1名／13.6.10／16th International Graphonomics Society Conference エクスカーション
●フランス／フランス世界遺産協会　事務局長 クロエ・カンポ・ドウ・モントゾン／13.7.10／世界遺産ロワール渓谷協議会からの視察
●大韓民国／公州国立博物館 金美京／13.8.8／視察
●イギリス／ロンドン大学東洋アフリカ研究所・教授 エリザベス・ムーア／13.8.22／所内研究会にて講演（ミャンマーの文化遺産）
●キリバス共和国／Ministry of Internal & Social Affairs, Culture and Museum Division / Cultural Officer Natan Itonga／13.8.1～8.26／ユネスコ・アジア文化センターが実施する研究への協力
●キリバス共和国／Ministry of Environment, Land and Agricultural Developments, Land Management Division / Senior Cartographer Tiaontin Enari／13.8.1～8.26／ユネスコ・アジア文化センターが実施する研究への協力
●ドイツ／ベルリン応用科学大学　学生 Anna puntigam／13.8.1～11.25／金属遺物の保存修復について研修
●バングラディッシュ／Department of Archaeology / Custodian Mohammad Mohidul Islam／13.9.3～10.3／ACCU集団研修―木造建造物の保存と修復
●ブータン王国／Ministry of Home and Cultural Affairs, Royal Government of Bhutan / Assistant Architect Sangay Kinga／13.9.3～10.3／ACCU集団研修―木造建造物の保存と修復
●ブルネイ　ダルサラーム国／Ministry of Culture, Youth and Sport / Scientific officer Siti Northayatty binit Haji Morni／13.9.3～10.3／ACCU集団研修―木造建造物の保存と修復
●インドネシア／Cultural Service Office of Yogyakarta Special Region / Staff of Cultural Heritage Protection Rully Andriadi／13.9.3～10.3／ACCU集団研修-木造建造物の保存と修復
●カザフスタン共和国／Kazarchaeology LLP / Research engineer Gulnaz Kulmaganbetova／13.9.3～10.3／ACCU集団研修-木造建造物の保存と修復
●キルギス共和国／American University of Central Asia / Associate Professor Abdykanova Aida Kalydaevna／13.9.3～10.3／ACCU集団研修-木造建造物の保存と修復
●ラオス人民民主共和国／Vientiane Capital Department of Information Cultural and Tourism / Technical Staff Thammavong Siviengham Vieng／13.9.3～10.3／ACCU集団研修―木造建造物の保存と修復
●モルディブ共和国／Department of Heritage Ministry of Tourism, Arts and Culture / Assistant Research Officer Ismaiel Nasru／13.9.3～10.3／ACCU集団研修-木造建造物の保存と修復
●マーシャル諸島共和国／Ministry of Internal Affairs / Historian Titiml Stevens R.／13.9.3～10.3／ACCU集団研修-木造建造物の保存と修復
●モンゴル国／Ministry of Construction and Urban Dvelopment / Officer in charge of Urban redevelopment Enkh-Amgalan Ariunnyam／13.9.3～10.3／ACCU集団研修-木造建造物の保存と修復
●ニュージーランド／New Zealand Historic Plaes Trust / Heritage Advisor Blyss Wagstaff／13.9.3～10.3／ACCU集団研修-木造建造物の保存と修復
●パキスタン／Directorate General of Archaeology / Sub-Divisional Officer Archaeology Jhelum Muhammad Imran Zahid／13.9.3～10.3／ACCU集団研修-木造建造物の保存と修復
●フィリピン／National Historical Commission of the Philippines / Architect Ⅱ / Restoration Architect Crisanto B. Lustre

Ⅱ／13.9.3～10.3／ACCU集団研修―木造建造物の保存と修復
●スリランカ／Ministry of National Heritage / Assistant Secretary Singappulige Nayana Dharshani Hewa／13.9.3～10.3／ACCU集団研修―木造建造物の保存と修復
●タイ／The 12th Reginal Office of Fine Arts Department aaaanakorn Ratchasima / Archaeologist (Professional level) Thanaphattarapornchai Montri／13.9.3～10.3／ACCU集団研修-木造建造物の保存と修復
●ベトナム社会主義共和国／Viet Nam Institute of Architecture, Urban and rural planning-Ministry of Construction / Manager Do Thi Thu Van／13.9.3～10.3／ACCU集団研修-木造建造物の保存と修復
●エジプト／大エジプト博物館保存修復センター無機物修復研究室長 Emam Abd El-Allah／13.9.9／文化財保存修復関連機関への視察研修
●エジプト／大エジプト博物館保存修復センター無機物修復研究室員 Mahmoud Anis／13.9.9／文化財保存修復関連機関への視察研修
●エジプト／大エジプト博物館保存修復センター無機物修復研究室員 Anwer Rashed／13.9.9／文化財保存修復関連機関への視察研修
●アメリカ合衆国／カリフォルニア大学バークレー校 カール・ゲラート／13.9.17～9.16／国際交流基金による研究受入
●マレーシア／マラヤ大学 Yahaya Ahmad／13.10.28／視察
●マレーシア／マラヤ大学 Helena Aman Hashim／13.10.28／視察
●バングラディッシュ／Ministry of Cultural Affairs, Department of Archaeology / Assistant Architect Khandokar Mahfuz Alam／13.11.5～11.28／ACCU個人研修
●バングラディッシュ／Ministry of Cultural Affairs, Department of Archaeology / Regional Director Md. Ataur Rahman／13.11.5～11.28／ACCU個人研修
●バングラディッシュ／Ministry of Cultural Affairs, Department of Archaeology / Field Officer Mohammad Golam Fardaush／13.11.5～11.28／ACCU個人研修
●台湾／台湾国立文化部文化資産局古物遺址組 組長 梁 華綸／13.11.8～／視察
●台湾／台湾国立文化部文化市民局 李明俊／13.11.8～／視察
●台湾／台湾中日経済文化代表處 薛 銀樹／13.11.8～／視察
●スウェーデン／ヨーテボリ大学 教授 クリスチャン・クリスチャンセン／13.11.13～／視察
●中華人民共和国／中国文化遺産研究院副院長 柴 曉明／13.11.21～11.22／日本における大型遺跡の保存活用に関する研究調査
●中華人民共和国／中国文化遺産研究院文物研究所 副所長 杜 曉帆／13.11.21～11.22／日本における大型遺跡の保存活用に関する研究調査
●中華人民共和国／中国文化遺産研究院館員 余 建立／13.11.21～11.22／日本における大型遺跡の保存活用に関する研究調査
●中華人民共和国／中国文化遺産研究院研究員 于 冰／13.11.21～11.22／日本における大型遺跡の保存活用に関する研究調査
●中華人民共和国／中国文化遺産研究院副研究員 趙 夏／13.11.21～11.22／日本における大型遺跡の保存活用に関する研究調査
●中華人民共和国／国務院発展研究中心社会発展研究部 研究室主任 蘇 楊／13.11.21～11.22／日本における大型遺跡の保存活用に関する研究調査
●オーストラリア／Australian Research Council Postdoctoral Fellow Martin Polkinghorne／13.12.14～／アンコール遺跡研究に関する講演会
●英国／セインズベリー日本芸術研究所所長 水鳥真美／14.1.8／視察
●英国／セインズベリー日本芸術研究所副所長 サイモン・ケイナー／14.1.8／視察
●英国／セインズベリー日本芸術研究所研究員 ウェルナー・シュタインハウス／14.1.8／視察
●台湾／台北文化センター 朱文清 ／14.3.14／視察
●台湾／台北文化センター 詹富森／14.3.14／視察

海外からの招聘者一覧

●Nguyen Quang THUAN（ベトナム社会科学院副院長）／ベトナム社会主義共和国／13.5.24～5.31
●Lu'u Thi Anh TUYET（ベトナム社会科学院国際協力部副部長）／ベトナム社会主義共和国／13.5.24～5.31
●Nguyen Giang HAI（ベトナム社会科学院国際協力部部長）／ベトナム社会主義共和国／13.5.24～5.31
●Bui Duy TRI（ベトナム社会科学院帝都研究センター長）／ベトナム社会主義共和国／13.5.24～5.31
●Quach Van ACH（ベトナム社会科学院国際協力部副部長）／ベトナム社会主義共和国／13.5.24～5.31
●Tong Trung TIN（ベトナム社会科学院考古研究所長）／ベトナム社会主義共和国／13.5.24～5.31
●Nguyen Van ANH（ベトナム社会科学院帝都研究センター建造物装飾調査部長）／ベトナム社会主義共和国／13.5.24～5.31
●Le Thi Minh TRA（ベトナム社会科学院帝都研究センター国際協力室研究員）／ベトナム社会主義共和国／13.5.24～5.31
●南浩鉉（国立慶州文化財研究所）／大韓民国／13.8.1～9.27
●Tran Van Chu（Rector Vietnam Forestry University）／ベトナム社会主義共和国／13.8.24～9.1
●Le Xuan Phuong（Senior Lecture Vice-Head of Science Technology and International Divisin Vietnam Forestry University）／ベトナム社会主義共和国／13.8.24～9.1
●Do Thi Ngoc Bich（Lecture Director of Testing Center for Forest Products Vietnam Forestry University）／ベトナム社会主義共和国／13.8.24～9.1
●李恩碩（韓国文化財庁 学芸研究士）／大韓民国／13.9.9～9.15
●韓志仙（韓国国立文化財研究所 学芸研究士）／大韓民国／13.9.14～9.20
●Rufino Mauricio（ミクロネシア教育大臣）／ミクロネシア連邦／13.10.12～10.20
●沈陽（中国文化遺産研究院 総工程師弁公室 副総工程師）／中華人民共和国／13.11.12～11.16
●削東（中国文化遺産研究院 文物保護工程・規画所 副研究館員）／中華人民共和国／13.11.12～11.16
●党志剛（中国文化遺産研究院 科研・総合業務処 館員）／中華人民共和国／13.11.12～11.16
●孫新民（河南省文物考古研究院 研究館員）／中華人民共和国／13.11.18～11.27
●白宜鄭（河南省文物考古研究院 館員）／中華人民共和国／13.11.18～11.27
●李勝利（河南省文物考古研究院 館員）／中華人民共和国／13.11.18～11.27
●邢穎（河南省文物考古研究院 館員）／中華人民共和国／13.11.18～11.27
●梁法偉（河南省文物考古研究院 館員）／中華人民共和国／13.11.18～11.27
●崔柄墻（韓国国立文化財研究所）／大韓民国／13.11.12～11.16
●池成眞（韓国国立文化財研究所）／大韓

民国／13.11.12～11.16
●朴贊珉（韓国国立文化財研究所）／大韓民国／13.11.12～11.16
●Feng Wang（南京林業大学　大学院生）／中華人民共和国／14.1.26～2.15
●U Ko Ko Aung（文化省　考古博物館部副部長）／ミャンマー／14.2.2～2.8
●U Kyaw Nyi Htet（文化省　考古フィールドスクール（ピイ）助教）／ミャンマー／14.2.2～2.8
●U Maung Maung Nan New（文化省考古フィールドスクール（ピイ）副手）／ミャンマー／14.2.2～2.8
●Nguyen Duc Thanh（Wood Processing Departmenr Forest Industries Reasch Institute Vietnamese Academy of Forest Sciences 研究員）／ベトナム社会主義共和国／14.2.17～3.1
●権宅章（国立羅州文化財研究所　学芸研究士）／大韓民国／14.3.3～3.7
●Nhoem Sophorn（王立芸術大学卒業生）／カンボジア王国／14.3.15～3.21
●Sok Chanthida（王立芸術大学卒業生）／カンボジア王国／14.3.15～3.21

研究者の海外渡航一覧

●児島　大輔：アメリカ合衆国／13.4.3～4.13／ミルウオーキー Art Asia Gallery およびシカゴ美術館所蔵木彫像等の資料調査のため／科研費
●森先　一貴：ロシア連邦／13.4.10～4.13／ロシア沿海州における遺跡出土資料の調査／科研費
●森本　晋：フランス／13.4.14～4.19／アンコール地域における調査情報の共有に関する協議／運営費交付金
●杉山　洋：カンボジア王国／13.4.19～4.24／西トップ遺跡の調査研究／運営費交付金
●佐藤　由似：カンボジア王国／13.4.19～5.5／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金
●佐藤　由似：タイ／13.5.6～5.17／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金
●石田　由紀子：大韓民国／13.5.13～6.27／国立慶州文化財研究所との発掘調査交流に参加するため／運営費交付金・先方負担
●庄田　慎矢：大韓民国／13.5.21～5.23／釜山大学申敬澈寄贈図書の実態調査のため／運営費交付金
●佐藤　由似：カンボジア王国／13.5.27～8.10／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金
●加藤　真二：中華人民共和国／13.6.1～6.8／科学研究費による儀征市博物館所蔵漢墓木材の年輪調査／科研費
●杉山　洋：カンボジア王国／13.6.4～6.9／西トップ遺跡の調査研究／運営費交付金
●玉田　芳英：大韓民国／13.6.12～6.14／日韓共同研究および発掘調査交流に関する打ち合わせ／運営費交付金
●清野　孝之：大韓民国／13.6.12～6.14／日韓共同研究および発掘調査交流に関する打ち合わせ／運営費交付金
●松村　恵司：大韓民国／13.6.12～6.14／日韓共同研究および発掘調査交流に関する打ち合わせ／運営費交付金
●諫早　直人：大韓民国／13.6.12～6.16／日韓共同研究および発掘調査交流に関する打ち合わせ、国立中央博物館における匈奴墓出土馬具に関する調査助言／運営費交付金・先方負担
●杉山　洋：カンボジア王国／13.6.14～6.30／西トップ遺跡の調査研究、世界遺産委員会への参加／運営費交付金
●森本　晋：カンボジア王国／13.6.15～6.30／第37回世界遺産委員会出席／運営費交付金
●菊地　淑人：カンボジア王国／13.6.15～6.30／第37回世界遺産委員会出席／運営費交付金
●石村　智：カンボジア王国／13.6.17～6.24／西トップ遺跡の調査研究／運営費交付金
●丹羽　崇史：中華人民共和国／13.6.19～6.22／河南省文物考古研究所との共同研究に関する協議／運営費交付金
●玉田　芳英：中華人民共和国／13.6.19～6.22／河南省文物考古研究所との共同研究に関する協議／運営費交付金
●加藤　真二：中華人民共和国／13.6.28～7.2／科学研究費による中国細石刀文化の基礎的研究のための資料調査・学会発表／科研費
●庄田　慎矢：大韓民国／13.7.6～7.15／日韓共同研究および科学研究補遺と関わる調査研究のため／運営費交付金・先方負担・科研費
●杉山　洋：カンボジア王国／13.7.17～7.18／西トップ事業／運営費交付金
●石村　智：ミャンマー／13.7.19～7.24／受託　平成25年度ミャンマーの文化遺産保護に関する拠点交流事業の考古分野における協議と調査／運営費交付金
●森本　晋：ミャンマー／13.7.19～7.28／受託　平成25年度ミャンマーの文化遺産保護に関する拠点交流事業の考古分野における協議と調査／運営費交付金
●杉山　洋：ミャンマー／13.7.19～8.2／受託　平成25年度ミャンマーの文化遺産保護に関する拠点交流事業の考古分野における協議と調査／運営費交付金
●脇谷　草一郎：カンボジア王国／13.7.29～8.2／西トップ遺跡修復事業における保存科学調査／運営費交付金
●田村　朋美：カンボジア王国／13.7.29～8.2／西トップ遺跡修復事業における保存科学調査／運営費交付金
●髙妻　洋成：カンボジア王国／13.7.29～8.2／西トップ遺跡修復事業における保存科学調査／運営費交付金
●脇谷　草一郎：ベトナム社会主義共和国／13.8.7～8.10／タンロン皇城遺跡保存にかかる現地調査に参加／東京文化財研究所
●杉山　洋：カンボジア王国／13.8.9～8.21／科研による西トップ遺跡における発掘調査／科研費
●諫早　直人：イギリス／13.8.14～8.23／科学研究費補助金「ゴーランドの古墳研究の総合的検証と古墳文化に対する国際的理解への活用」にかかる調査／先方負担
●川畑　純：中華人民共和国／13.8.14～8.25／洛陽宮城出土瓦の調査および関連遺跡・遺物の調査／運営費交付金
●今井　晃樹：中華人民共和国／13.8.14～8.25／洛陽宮城出土瓦の調査および関連遺跡・遺物の調査／運営費交付金
●森先　一貴：中華人民共和国／13.8.14～8.25／洛陽宮城出土瓦の調査および関連遺跡・遺物の調査／運営費交付金
●栗山　雅夫：中華人民共和国／13.8.14～8.25／洛陽宮城出土瓦の調査および関連遺跡・遺物の調査／運営費交付金
●小田　裕樹：大韓民国／13.8.18～8.22／東アジアにおける食器構成と食事作法の変化に関する比較研究の一環として、扶余地域出土土器の調査／科研費
●石村　智：カンボジア王国／13.8.26～9.6／西トップ遺跡の調査研究／運営費交付金
●森本　晋：フランス／13.9.1～9.14／CIPA2013（文化遺産記録国際委員会）出席ならびにデータベースに関する調査／運営費交付金
●田代　亜紀子：インドネシア／13.9.2～9.14／科研（B）「西スマトラ州パダン歴史地区における文化遺産復興に関する総合的研究」社会調査／科研費
●佐藤　由似：カンボジア王国／13.9.2～9.27／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金
●髙妻　洋成：大韓民国／13.9.4～9.7／2013東アジア文化遺産保存国際シンポジウムに出席／運営費交付金
●田村　朋美：大韓民国／13.9.4～9.8／

2013東アジア文化遺産保存国際シンポジウムに出席、発表／科研費
●杉山　洋：カンボジア王国／13.9.8～9.9／西トップ遺跡の調査研究／文化財保護振興財団
●髙妻　洋成：ベトナム社会主義共和国／13.9.10～9.12／タンロン皇城i遺跡保存に係る現地調査／東京文化財研究所
●杉山　洋：ベトナム社会主義共和国／13.9.10～9.15／タンロン皇城シンポジウムへの出席／ユネスコ委託事業
●惠谷　浩子：フランス共和国／13.9.11～9.19／文化的景観に関する諸外国との比較研究（現地調査/フランス）／運営費交付金
●今井　晃樹：ベトナム社会主義共和国／13.9.12～9.15／文化庁受託拠点交流事業調査および講演／拠点交流事業
●小野　健吉：トルコ／13.9.13～9.16／庭園等現地調査／京都大学研究経費
●菊地　淑人：アメリカ合衆国／13.9.15～9.20／コロンビア大学との研究協力および交流／運営費交付金
●中島　義晴：アメリカ合衆国／13.9.15～9.20／コロンビア大学との研究協力および交流／運営費交付金
●海野　聡：アメリカ合衆国／13.9.15～9.20／コロンビア大学との研究協力および交流／運営費交付金
●小野　健吉：キルギス共和国／13.9.18～9.12／拠点交流事業ワークショップ（講師）／拠点交流事業費（東文研）
●諫早　直人：中華人民共和国／13.9.21～9.24／渤海、遼金代都城の踏査および関連遺跡・遺物の調査／運営費交付金
●今井　晃樹：中華人民共和国／13.9.21～9.29／渤海、遼金代都城の踏査および関連遺跡・遺物の調査／運営費交付金
●和田　一之輔：中華人民共和国／13.9.21～9.29／渤海、遼金代都城の踏査および関連遺跡・遺物の調査／運営費交付金
●小澤　毅：中華人民共和国／13.9.21～9.29／渤海、遼金代都城の踏査および関連遺跡・遺物の調査／運営費交付金
●荒田　敬介：中華人民共和国／13.9.21～9.29／渤海、遼金代都城の踏査および関連遺跡・遺物の調査／運営費交付金
●栗山　雅夫：中華人民共和国／13.9.21～9.29／渤海、遼金代都城の踏査および関連遺跡・遺物の調査／運営費交付金
●小田　裕樹：中華人民共和国／13.9.24～9.29／河南省・四川省における唐三彩と関連資料の現地調査／運営費交付金
●丹羽　崇史：中華人民共和国／13.9.24～9.29／河南省・四川省における唐三彩と関連資料の現地調査／運営費交付金
●難波　洋三：中華人民共和国／13.9.24～9.29／河南省・四川省における唐三彩と関連資料の現地調査／運営費交付金
●森先　一貴：ロシア連邦／13.9.25～10.2／ロシア連邦サハリン州スラブナヤ遺跡の調査／科研費
●菊地　淑人：大韓民国／13.10.11～10.17／国際会議出席および名勝地調査等／科研費
●惠谷　浩子：大韓民国／13.10.11～10.17／国際会議出席および名勝地調査等／科研費
●平澤　毅：大韓民国／13.10.11～10.20／国際会議出席および名勝地調査等／科研費
●佐藤　由似：カンボジア王国／13.10.14～11.1／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金
●林　良彦：スリランカ民主社会主義共和国／13.10.16～10.28／ ACCU主催文化遺産ワークショップ2013―スリランカ民主社会主義共和国・キャンディにおける現地研修―の講師／先方負担（ACCU）
●桑田　訓也：大韓民国／13.10.17～10.20／第7回　新羅學國際學術大會への参加／先方負担（新羅文化遺産研究院）
●杉山　洋：カンボジア王国／13.10.23～10.31／西トップ遺跡の調査研究／朝日文化財団
●井上　幸：大韓民国／13.10.25～10.27／学会発表のため／科研費
●大林　潤：カンボジア王国／13.10.27～10.31／西トップ遺跡の調査と修復／運営費交付金
●海野　聡：カンボジア王国／13.10.27～10.31／西トップ遺跡の調査と修復／運営費交付金
●成田　聖：カンボジア王国／13.10.27～10.31／西トップ遺跡の調査と修復／運営費交付金
●丹羽　崇史：中華人民共和国／13.10.30～11.4／中国古陶瓷年会への参加／運営費交付金
●小田　裕樹：大韓民国／13.11.8～11.9／日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究中間盛夏発表会への出席、発表のため／運営費交付金
●清野　孝之：大韓民国／13.11.8～11.9／日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究中間盛夏発表会への出席、発表のため／運営費交付金
●廣瀬　覚：大韓民国／13.11.8～11.9／日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究中間盛夏発表会への出席、発表のため／運営費交付金
●諫早　直人：大韓民国／13.11.8～11.9／日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究中間盛夏発表会への出席、発表のため／運営費交付金
●馬場　基：大韓民国／13.11.8～11.9／日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究中間盛夏発表会への出席、発表のため／運営費交付金
●加藤　真二：中華人民共和国／13.11.16～11.24／科学研究費による中国細石刃文化の基礎的研究のための資料調査・霊井遺跡出土細石器報告書の原稿納品／科研費
●吉川　聡：インドネシア／13.11.18～11.22／インドネシア文字文化財に関する国際シンポジウムでの講演／先方負担（東京外国語大学）
●佐藤　由似：カンボジア王国／13.11.18～12.12／アンコール遺跡群西トップ遺跡建築装飾群の研究と復元／運営費交付金
●田代　亜紀子：インドネシア／13.11.19～11.26／科研（B）「西スマトラ州パダン歴史地区における文化遺産復興に関する総合的研究」社会調査／科研費
●杉山　洋：カンボジア王国／13.11.20～11.30／西トップ遺跡の調査研究／科研費
●小池　伸彦：中華人民共和国／13.11.23～11.30／遼寧省文物考古研究所との国際共同研究「遼西地域における都城の研究」（平成25・26年度共同研究・研究計画の協議、金嶺寺遺跡他出土瓦・金属製品等の調査／運営費交付金
●川畑　純：中華人民共和国／13.11.23～11.30／遼寧省文物考古研究所との国際共同研究「遼西地域における都城の研究」（平成25・26年度共同研究・研究計画の協議、金嶺寺遺跡他出土瓦・金属製品等の調査／運営費交付金
●諫早　直人：中華人民共和国／13.11.23～11.30／遼寧省文物考古研究所との国際共同研究「遼西地域における都城の研究」（平成25・26年度共同研究・研究計画の協議、金嶺寺遺跡他出土瓦・金属製品等の調査／運営費交付金
●栗山　雅夫：中華人民共和国／13.11.23～11.30／遼寧省文物考古研究所との国際共同研究「遼西地域における都城の研究」（平成25・26年度共同研究・研究計画の協議、金嶺寺遺跡他出土瓦・金属製品等の調査／運営費交付金
●田村　朋美：大韓民国／13.11.28～12.3／日中韓共同研究「三国時代の国家の成長と物質文化」2014年度国際シンポジウムに出席、発表および金海国立博物館所蔵ガラス製遺物の調査／先方負担（韓国學中央研究院）・科研費
●森本　晋：ウズベキスタン／13.11.29～12.6／文化財データベースに関するユネス

コ主催ワークシップで講義／東京文化財研究所
●石村　智：カンボジア王国／13.12.1～12.6／アンコール遺跡国際調整委員か出席および西トップ遺跡の調査研究／西トップ寄付金
●田代　亜紀子：イタリア／13.12.8～12.15／バーミヤン専門家会議出席・西アジア文化遺産調査／運営費交付金
●森本　晋：イタリア／13.12.8～12.15／バーミヤン専門家会議出席・西アジア文化遺産調査／運営費交付金
●中川　あや：大韓民国／13.12.10～12.13／大韓民国における都城遺跡展示の手法の調査研究／受託
●渡邉　淳子：大韓民国／13.12.10～12.13／大韓民国における都城遺跡展示の手法の調査研究／受託
●髙妻　洋成：中華人民共和国／13.12.10～12.14／2013出土木漆器保護国際学術検討会／木漆器保護国家文物局重点科研基地
●杉山　洋：カンボジア王国／13.12.11～12.14／西トップ遺跡の調査研究／寄付金
●諫早　直人：大韓民国／13.12.15～12.20／日韓共同研究「日本列島における金工生産と新羅」に基づく調査研究／運営費交付金・先方負担（韓国国立文化財研究所）
●青木　敬：大韓民国／13.12.17～12.19／蓮山洞古墳群関連国際学術会議での発表のため／先方負担（釜山大学校博物館）
●佐藤　由似：カンボジア王国／13.12.18～1.4／アンコール遺跡群西トップ遺跡南祠堂と北祠堂の調査修復／助成金　朝日新聞文化財団
●森先　一貴：ロシア連邦／13.12.21～12.25／ロシア連邦サハリン州スラブナヤ5遺跡の調査／科研費
●杉山　洋：カンボジア王国／13.12.25～12.31／西トップ遺跡の調査研究／助成金
●丹羽　崇史：中華人民共和国／13.12.27～1.4／隋州葉家山西周墓地国際学術検討会への参加／先方負担
●井上　幸：中華人民共和国／13.12.28～12.31／資料収集／科研費
●森本　晋：カンボジア王国／14.1.12～1.18／アンコールデータベース調査／科学研究費（森本）・受託
●石村　智：カンボジア王国／14.1.12～1.18／アンコールデータベース調査／科学研究費（森本）・受託
●田村　朋美：カンボジア王国／14.1.13～1.18／ the 20th Congress of the Indo-Pacific Prehistory Association に出席、研究発表／科研費
●田代　亜紀子：ベトナム社会主義共和国／14.1.14～1.19／文化庁受託事業ベトナム出土木材に関する調査・研修／運営費交付金
●髙妻　洋成：ベトナム社会主義共和国／14.1.14～1.19／文化庁受託事業ベトナム出土木材に関する調査・研修／運営費交付金
●脇谷　草一郎：ベトナム社会主義共和国／14.1.14～1.19／文化庁受託事業ベトナム出土木材に関する調査・研修／運営費交付金
●廣瀬　覚：ベトナム社会主義共和国／14.1.14～1.19／文化庁受託事業ベトナム出土木材に関する調査・研修／運営費交付金
●森本　晋：ミャンマー／14.1.19～1.26／拠点交流事業ワークショップ開催のため／科学研究費（森本）・受託
●石村　智：ミャンマー／14.1.19～1.26／受託平成25年度ミャンマーの文化遺産保護に関する拠点交流事業の考古分野におけるワークショップでの講義／科学研究費（森本）・受託
●小田　裕樹：ミャンマー／14.1.19～1.26／受託平成25年度ミャンマーの文化遺産保護に関する拠点交流事業の考古分野におけるワークショップでの講義／受託
●杉山　洋：ミャンマー／14.1.19～1.24／シュリクケトラ遺跡の調査／委託
●杉山　洋：カンボジア王国／14.1.25～1.30／西トップ遺跡の調査と修復／科研費
●石村　智：サモア／14.1.30～2.11／平成25年度文化庁博物館・美術館相互交流事業によるサモア国立博物館改修にかかる助言／文化庁
●杉山　洋：カンボジア王国／14.2.14～2.18／カンボジアにおける中世都城の調査研究／奈良女子大学研究費
●加藤　真二：中華人民共和国／14.2.17～2.23／科学研究費のよる中国細石刃文化の基礎的研究のため資料収集／科研費
●芝　康次郎：中華人民共和国／14.2.17～2.23／科学研究費のよる中国細石刃文化の基礎的研究のため資料収集／科研費
●玉田　芳英：連合王国／14.2.17～2.24／京大大学院講義のための資料調査／京大経費
●平澤　毅：大韓民国／14.2.18～2.21／韓国の世界文化遺産登録資産に関する調査研究事業関係調査等／筑波大学による文化庁受委託業務
●石村　智：キリバス／14.2.18～2.22／平成25年度文化庁専門家派遣事業による、温暖化により危機に瀕する文化遺産の調査／文化庁
●石村　智：フィージー／14.2.23～2.24／平成25年度文化庁専門家派遣事業による、温暖化により危機に瀕する文化遺産の調査／文化庁
●杉山　洋：カンボジア王国／14.2.23～2.28／カンボジア・プレアビヒア遺跡の調査／科研費
●石村　智：ツバル／14.2.25～3.2／平成25年度文化庁専門家派遣事業による、温暖化により危機に瀕する文化遺産の調査／文化庁
●平澤　毅：台湾／14.3.8～3.11／台湾の名勝地に関する現地調査等／科研費
●前川　歩：台湾／14.3.8～3.11／台湾の名勝地に関する現地調査等／科研費
●杉山　洋：カンボジア王国／14.3.8～3.13／カンボジア・西トップ遺跡の調査／科研費
●今井　晃樹：中華人民共和国／14.3.10～3.14／第一次大極殿院復元研究に関する資料の調査／受託　大極殿事業費
●森川　実：中華人民共和国／14.3.10～3.14／第一次大極殿院復元研究に関する資料の調査／受託　大極殿事業費
●川畑　純：中華人民共和国／14.3.18～3.25／遼寧省文物考古研究所との国際共同研究「遼西地域における都城の研究」（平成25・26年度共同研究・研究計画の協議、金嶺寺遺跡他出土瓦・金属製品等の調査／運営費交付金
●小池　伸彦：中華人民共和国／14.3.18～3.25／遼寧省文物考古研究所との国際共同研究「遼西地域における都城の研究」（平成25・26年度共同研究・研究計画の協議、金嶺寺遺跡他出土瓦・金属製品等の調査／運営費交付金
●廣瀬　覚：中華人民共和国／14.3.18～3.25／遼寧省文物考古研究所との国際共同研究「遼西地域における都城の研究」（平成25・26年度共同研究・研究計画の協議、金嶺寺遺跡他出土瓦・金属製品等の調査／運営費交付金
●栗山　雅夫：中華人民共和国／14.3.18～3.25／遼寧省文物考古研究所との国際共同研究「遼西地域における都城の研究」（平成25・26年度共同研究・研究計画の協議、金嶺寺遺跡他出土瓦・金属製品等の調査／運営費交付金
●平澤　毅：大韓民国／14.3.21～3.23／韓国の名勝地に関する現地調査／科研費
●森先　一貴：大韓民国／14.3.21～3.23／日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究に係る調査／運営費交付金
●若杉　智宏：大韓民国／14.3.21～3.23／日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究に係る調査／運営費交付金
●諫早　直人：大韓民国／14.3.21～3.23／日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究に係る調査／運営費交付金
●荒田　敬介：大韓民国／14.3.21～3.23

／日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究に係る調査／運営費交付金
●小野　健吉：ベトナム社会主義共和国／14.3.21～3.27／世界遺産に登録されたベトナムの遺跡等の調査／京大経費
●田村　朋美：イタリア／14.3.29～4.4／日伊文化財協力事業への出席／文化庁

公開講演会

特別講演会（東京会場）
〈歴史の証人〉木簡を究める
2013年9月22日

◆渡辺　晃宏：木簡を掘る―資料としての木簡、木簡の出土と整理―

日本古代の歴史を考える上で不可欠の資料となった木簡は、ともすれば文字資料としての面のみが注目されがちである。しかし、木簡は文字資料であると同時に、文字を記す木製品として、発掘によって見付かる考古資料としての属性を合わせもっている。そこで、木簡のもつ情報の多面性を知っていただくため、普段モノとしての木簡を取り扱っている立場から、６本の報告で講演会を組み立てた。

木簡とはなにか、紙と木の使い分けという木簡使用の理由、木簡の資料としての特性―文字資料・木製品・考古資料―等、木簡という資料の概要について述べたあと、木簡が出土する遺構や状況、および保存環境、木簡の資料としてのはたらきについて紹介した。また、木簡取り上げの具体例として、平城宮東方官衙出土の土坑SK19189の発掘事例を紹介した。

◆山本　祥隆：木簡を探る―木簡が明らかにした歴史の諸相―

木簡には、ほかの文献史料とは異なる独自の性質があり、それを活かせば、より豊かな歴史像を構築することができる。本講演では、木簡から描き出される歴史像について、具体的な事例を挙げつつ紹介した。

内容は、「木簡最大の功績―史書の〈ウソ〉を見破る」「深まる歴史像―史書の記述を彩る」「広がる歴史像―史書に残らぬ史実を語る」の三部構成とした。特に『日本書紀』『続日本紀』といった史書と対比することにより、古代史研究のなかで木簡の果たした役割や、木簡からこそ知りうる歴史事象等が浮き彫りになるよう意図した。

◆桑田　訓也：木簡を読む―木簡の情報を読み取り記録する―

木簡を読むということは、たんに書いてある文字を読むことではなく、文字が書かれている木が持つ情報も、丁寧に読み取る必要がある。文字と木の情報を総体的に読み取り、出土情報をふまえてはじめて、木簡は「歴史の証人」として活きてくる。また、木簡を読むといっても、常に実物を見て読むわけではなく、木簡の保存のために、実物観察は最小限にとどめる必要がある。出土後できるだけ早い段階で記録をとったら、実物は収蔵庫で厳重に保管し、写真と記録ノートを見て木簡を読んでいく。

◆山本　崇：木簡を広げる―古代以外の、さまざまな地域の木簡―

木簡は、「墨書・刻書・朱書等で文字が記された、出土した、木製品の総称」であり、2013年９月現在、日本の木簡出土点数は38万3,000点を超えた。ここでは、木簡の定義に注目しながら、一般によく知られる古代の文書や荷札とは異なる、類例の少ないものや新しい時代の多様な木簡の世界を示してみた。10万点におよぶ中世以降の木簡は、こけら経、卒塔婆等の仏教民族関係資料が多くを占め、その仲間には木簡としては数えていない伝世品も多く存在している。出土品は、劣化への対策と保存処理が緊要の課題であり区別されてきたが、木簡の機能を検討する上では、全体的な検討が課題といえる。

◆井上　幸：木簡と文字―データベース、木簡の文字―

木簡に関するデータベースや、当時の漢字の使用状況を紹介した。木簡データベースや木簡字典を利用すると、テキストや画像、関連する知識をWeb上で手軽に見ることできる。これらのデータから、当時使われていた文字の種類や漢字の練習、さまざまな字形等について述べた。この他、蓄積された文字画像データは、類例として木簡の解読に非常に有益であること、また、解読支援システムMokkanshopの文字認識技術への応用について紹介した。

◆髙妻　洋成：木簡を伝える―木簡の科学的な分析、保存処理と伝来環境―

木簡はどのような埋蔵環境で遺ってきたのか、どのような劣化状態にあるのか等について解説するとともに、脆弱な状態にある木簡をより安定した状態に移行させるための保存処理法を紹介した。地中に埋もれている間に腐朽が進行した木簡は高級アルコール含浸法や真空凍結乾燥法により安定した状態にすることができる。処理後の保管についても安定した温湿度環境および紫外線等の影響を受けない環境下で管理する必要がある。歴史の貴重な生き証人である木簡をより安定した状態で保存する研究が進められている。

◆パネルディスカッション：木簡研究の過去・現在・未来

木簡をモノとして扱う立場からの６本の報告を受け、戸丸彰子氏と馬場基の司会により、講演内容を深めるための討論をおこなった。

初めに、耒代誠仁氏（桜美林大学）に、奈良文化財研究所と共同開発した木簡釈読支援システムMokkanshop（モッカンショップ）の開発の経緯と最新の研究動向についての紹介があった。また、佐藤信氏（東京大学）から、木簡の研究には 、書写の場という視点が重要であるとの指摘をいただいた。

その後、会場からの質問用紙に答える形で、木簡のもつ個性、樹種や文字の地域性、木簡の廃棄方法、木簡の広がり、木簡の書風、歌木簡について、識字率の問題、木簡の材質、韓国木簡との比較研究、木簡を読む作業の様子等、報告内容を補足、展開させる話題について討論をおこない、木簡に関する理解を深めていただくことができた。

第112回公開講演会
2013年6月29日

◆松村　恵司：「貨幣とは何か―最古の貨幣をめぐる議論」

天武12年（683）の詔で使用を禁止された銀銭が無文銀銭であり、富本銭よりも古い最古の金属貨幣である。無文銀銭は一分に重量調整された銀で、製作地は新羅と推定され、地金価値で通用する物品貨幣の一種である。この無文銀銭が天武紀の銀銭と判明するまでの歴史をたどり、国内貨幣富本銭との性格の違いや、貨幣の機能、要件について考えた。無文銀銭の貨幣価値はそのまま和同銀銭に継承されており、古代では銀が価値尺度として機能していた。また、地金貨幣から名目貨幣への転換が、古代国家の成立と不可分であることを指摘した。

◆森先　一貴：「日本らしさのはじまり」

旧石器・縄文時代は日本列島の人類史の９割以上を占めるにもかかわらず、日本文化の基礎はその後の歴史が形成したものと考えられがちである。本発表では、考古学的に日本と大陸の先史文化を比較し、日本列島の旧石器・縄文文化に、現代の私たちの文化にわずかでも通じるものがないか点

検した。その結果、当時、大陸から日本列島への文化的影響は非常に限定的で、また列島全域におよぶ影響も認められないと分かった。むしろ、多様な環境・風土へのこまやかな適応と、多彩な地域ごとの生活文化の長きにわたる歴史に「日本らしさ」の淵源がみてとれると指摘した。

◆庄田　慎矢：「海を越えてきたもの、こなかったもの」

対馬海峡は、古くから日本列島と朝鮮半島の交流の舞台となってきた。大陸に起源する稲や金属器は、その起源地から千年以上かけて朝鮮半島まで伝わったが、その後はこの海峡を通じてすぐに日本へと渡り、急速に普及した。しかし、いっぽうで、この海峡は時には文化の壁としての役割も果たした。例えばアワやキビがこの海峡を越えるのには2000年以上、牛や馬等の家畜については1000年近くの時間がかかっている。平城京の時代に国家によって特別な意味を付与された、稲や、いわゆる「三種の神器」に含まれる金属の剣や鏡は、平城京よりも数百年、数千年前に日本列島に住んだ人々が積極的に自らのものとしてきたものであった。

第113回公開講演会

2013年10月26日

◆松村　恵司：「富本銭と藤原京―貨幣の発行と都城造営」

富本銭は江戸時代から知られていた銭貨である。これが天武紀の銅銭であることが判明するまでの研究史をたどり、富本の銭文の出典と意味、七曜文と陰陽五行思想との関係を考察した。また、７世紀後半の貨幣関係記事が、新城（藤原京）の造営記事と前後して『日本書紀』に登場することから、初めて建設する中国式都城藤原京で誕生する都市住民のために、貨幣経済の導入が企図され、富本銭が発行されたと論じた。富本銭は藤原京のために、和同開珎は平城京のために発行された国内通貨であった。

◆渡辺　丈彦：「東日本大震災文化財レスキュー事業における奈文研の取組」

2011年3月11日に発生した東日本大震災においては、多くの貴い人命が失われるとともに、様々な種類の貴重な文化財もまた被災した。これらの被災文化財のレスキュー事業は、東京文化財研究所を事務局とする東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会を中心におこなわれ、約２年間の間に、宮城県を中心とした沿岸地域市町村から多くの文化財が救出された。講演会においては、この文化財レスキュー事業全体のスキームを説明するとともに、主に奈良文化財研究所が中心になっておこなった具体的な作業を紹介し、今後、予想される大規模災害の発生に備え、求められる文化財レスキュー事業のあり方について提言をおこなった。

◆和田　一之輔：「一覆形埴輪―造形美に隠された世界」

古墳時代でもっとも象徴的な遺物といえる埴輪である。なかでも、形象埴輪は魅力的な造形美を備えていることもあり、考古学のみならず、美術や文学の世界に登場することも少なくない。

本講演では、形象埴輪のうち覆形埴輪を取り上げ、考古学的に造形表現の変遷と製作技術の変化を明らかにした。また、日本列島における東西差を見出すとともに、奈良県と京都府に跨る平城山丘陵を介した地域的なまとまりを指摘した。こうした地域性は、古墳時代だけではなく、現代社会においても通底するものであると考えた。

研究集会

◆庭園の歴史に関する研究会

2013年11月2日

2013年度の庭園の歴史に関する研究会は「室町時代の将軍の庭園」をテーマとして開催した。今回の研究会では、前回および前々回の研究会の論点整理、室町時代の将軍の庭園として代表的な室町殿・北山殿・東山殿の発掘成果、それらに配置された諸建築の構成・性格と室町の京都における環境文化、これまであまり検討されることのなかった９代以降の将軍邸の庭園、また、武家文化の理想形が追求された障壁画と庭園・建築との共通性に関する発表がおこなわれた。その後の討議では、各将軍邸の庭園の細部や、地方の武将の庭園におよぼした影響について、検討をくわえるとともに、各分野に共通する研究課題を確認することができた。2014年３月にこの研究会の報告書を刊行した。

◆古代官衙・集落研究会（第17回）

2013年12月13日～14日

2013年度は、「長舎と官衙の建物配置」と題して研究集会を開催した。

研究報告は、大橋泰夫「長舎と官衙研究の現状と課題」、鈴木一議「近畿地方の長舎建物」、長直信「九州における長舎建物の出現と展開―７世紀代を中心に―」、小宮俊久「関東、東北における長舎と官衙」、大林潤「長舎状遺構の構造的検討」、古市晃「文献史料からみた長舎と官衙―７世紀における儀礼空間―」、以上６本と、小田裕樹氏によるコメント１本からなる。発表終了後、黒坂貴裕氏の司会による総合討議をおこない、長舎の成立・展開・機能・構造に関する活発な討議が交わされた。

参加者は、地方公共団体・大学関係者等計137名、アンケートでは97％が有意義であったとの回答が寄せられた。なお、今回の研究集会の研究報告を2014年度に刊行する予定である。

このほか、2012年度に実施した研究集会の研究報告『塩の生産・流通と官衙・集落』を2013年12月に刊行した。

◆遺跡整備・景観合同研究集会

2014年1月24日～25日

2013年度は、『計画の意義と方法　～計画は何のために策定し、どのように実施するのか？～』をテーマとして、遺跡整備研究室の「遺跡等マネジメント研究集会」と景観研究室の「文化的景観研究集会」を合同で開催した。

24日は、開催趣旨のほか、JICAの取組から特別講演「地域振興と遺産に関するプロジェクトの計画と実践」をはじめ、基調講演１「個別計画から総合的計画へ」、基調講演２「景観価値の保全と計画」の３つの講演をおこなった。

25日は、実践事例から、「遺跡整備の立案と展開」、「地域資源保全のための計画策定の視点と方法」、「歴史まちづくりを実現するための計画と体系―宇治市の現状―」、「文化的景観をなじませるための計画策定―四万十川での試み―」の４つの報告を受け、講演・報告者をパネリストとして「計画の意義と方法」に関する総合討論をおこなった。　（平澤　毅・中島 義晴）

◆保存科学研究集会

2014年2月21日

文化財には様々な種類のものがあり、また、それがおかれている状況も様々である。多くの文化財が必ずしも整った環境で保存がおこなわれているわけではないことも実情である。今回は、そのような保存環境に関する現状の問題点を共有し、それらに対して今後どのように取り組んでいくべきかについて、「文化財の収蔵・展示環境」をテーマに研究集会を開催した。文化財の保存環境についての最新の研究成果や問題点に関する８件の研究発表の後、総合討議をおこなった。総合討議においては、考古遺物の保管環境、収蔵庫のシステム、収蔵庫や展示室の内装材、遺構露出展示のため

の覆屋内環境等について活発な議論が展開された。文化財の収蔵・展示環境について様々な問題点の共有が図れたことは有意義である。

科学研究費等

◆木簡等出土文字資料の資源化のための機能的情報集約と知の結集

代表者・渡辺 晃宏　基盤研究（S）新規

本研究は、歴史叙述に重要な役割を果たすようになった木簡等の出土文字資料のもつ情報を一元的に管理し、結集した知を新たな資料の情報抽出に役立てる、知の循環（スパイラル）を確立させ、資源化をはかることを目的とする。これは、A現在も出土し続ける厖大な木簡資料の情報取得の効率化、B木簡資料に関する様々な知の結集、Cそうして集められた木簡に関する情報や知を効率的に保管し活用するためのシステムの確立、という新たな３つの課題に対応するものである。

初年度の今年はA・Bを中心とし、A（1）木簡の情報を一元的に管理するためのアノテーションソフトのβ版作成・試験運用による有用性の確認、（2）画像データの蓄積、（3）字形ノイズや断片化された運筆等を修正・復元する技術の実現、MokkanshopへのWindows ８等で動作可能なタッチパネル対応ユーザインタフェースの実装、B（1）形状による検索ソフトの開発・試用、（2）字形データの集成、（3）木簡関係論文データベースの基礎作業等をおこなった。

このほかの成果としては、a「木簡字典」の外国語版（英・韓・中）の公開（2014/3/28）、b「木簡字典」の枠組みを利用した正倉院文書データベースの構築と文字画像データの切り出し、c第16回IGS国際会議（2013/6）への参加等がある。

◆東アジアにおける家畜の伝播とその展開に関する動物考古学的研究

代表者・松井 章　基盤研究（A）継続

2013年度は、５月に大分県にて大友府内町遺跡出土動物遺存体の継続調査をし、中世都市での動物利用に関する研究をおこなった。８月には中国で開催された『上海考古学フォーラム』、９月には生き物文化誌学会にて発表をおこなった。さらに、10月にはパリで開催された、学振共催の日仏共同学術アカデミー、11月には動物考古学会にて発表をし、さらに、中国浙江省の田螺山遺跡で継続調査を実施した。１月にはインド・タイ、２月にはベトナム・ラオス、３月に中国を訪問して関連資料を実見し、現地研究者と共同研究に合意する等、展望が広がりつつある。

◆マルチチャンネル機器を利用した高速遺跡探査技術の開発

代表者・金田 明大　基盤研究（A）継続

物理的手法を用いた遺跡の物理探査の効率化と高精度化を目的として研究を進めている。懸案であったアレイ式の探査機としてIDS社StreamX200、磁気探査機としてFoesterFEREXを導入し、平城宮および東大寺にて運用試験をおこなった。また、GPSを利用した位置精度の向上についても成果を得た。しかし、日本における幅広い利用の推進のためには、トータルステーション等、GPSに比べ建物や樹木の影響を受けにくい測位技術の利用が不可欠であり、現在、これらの技術の利用について検討を進めている。また、遺跡での運用を想定した機器牽引用の道具についても設計と試作を進めている。

◆アンコール遺跡群を事例とした考古情報資源共有化に関する研究

代表者・森本 晋　基盤研究（A）新規

本研究は、我が国の研究者によって海外でおこなわれてきた文化遺産調査の成果を収集・蓄積して発信するシステム構築を目指す。具体的には、日本人研究者による研究事例が多いカンボジアのアンコール遺跡群を事例として、蓄積されている考古資料を整理し電子化をおこないながら、それら情報資源の共有化に向けたシステムの構築と情報標準の確立を目標としている。４カ年計画の初年度にあたる2013年度は、各研究機関が所蔵している従来の研究成果である、実測図や写真等の資料を整理して電子化する作業に取り掛かった。電子化した写真をデータベースに登録する際にメタデータをできるだけ自動化して付与する仕組みの開発もおこなった。

◆南都における廃仏毀釈後の資料動態に関する調査研究

代表者・吉川 聡　基盤研究（B）継続

最終年度の2013年度は、新修東大寺文書聖教の調査をおこない、史料の整理・翻刻をおこなった。また内容を検討して、論考を執筆した。その成果として、科学研究費補助金研究成果報告書１『東大寺図書館所蔵中村純一寄贈文書調査報告書』・同２『東大寺図書館所蔵新修東大寺文書聖教調査報告書第46函～第77函』を刊行した。それぞれに、本科研で調査した史料の目録と、論考とを収録した。また前者には、明治維新期の興福寺・奈良の動向を記した日記の一部を翻刻して掲載した。

◆中国細石刃文化の基礎的研究―河南省霊井石器群の分析を中心として―

代表者・加藤 真二　基盤研究（B・海外）継続

報告書の執筆、翻訳、図版作成等の作業を進めた。夏期に唐山博物館ほかで調査を実施、銀川ではアジア旧石器協会中国大会にて研究成果を紙上発表し、出土品調査と遺跡巡検もおこなった。秋期に天津市文化遺産保護中心で天津市域、鄭州市文物考古研究院で河南省中部の資料を観察し、河南省文物考古研究院で霊井石器群の整理報告書原稿を李占揚研究員に提出。冬期には吉林大学、吉林省文物考古研究所、河北省文物研究所で資料観察した。また、北アジア調査研究報告会（札幌学院大学、平成26年３月１・２日）で研究報告したほか、研究成果報告書を刊行。その概要は紀要2014を参照。

◆和同開珎の生産と流通をめぐる総合的研究

代表者・松村 恵司　基盤研究（B）継続

４ヶ年計画の２年目にあたる本年度は、全国から6,300枚近く出土している和同銅銭の分布状況を分析するため、官道と駅、国府を入れた古代の国郡図を国単位に作成し、そこに出土地点を落とす作業を継続している。これにより出土遺跡と官道や官衙との位置関係が明確になり、在地における和同開珎の流通状況を考察するための基礎資料が整いつつある。また、古代の貨幣関係史料の網羅的な集成作業と編年、整理作業が終了したため、「日本古代貨幣関係史料集稿（一）」として、今年度に刊行した研究報告書『和同開珎の生産と流通（一）』に掲載した。

◆中国漢代の木槨・木棺材を用いた年輪年代学の確立と用材選択の意義

代表者・光谷 拓実　基盤研究（B）新規

2013年度は、儀征市に所在する儀征博物館を中国側の共同研究者とともに訪問し、同博物館が所蔵する漢代の木棺や木槨材（広葉杉と楠木）のなかから、年輪解析用に適した試料の一部を採取した。読み取った年輪データをもとに年輪年代学的な検討をおこなった結果、年輪パターンの照合が成立したものが複数の試料において確認されたので、広葉杉を用いた年輪年代学の研究が可能であるとの見通しを得た。但し、広葉杉のなかには不連続年輪の存在するものがあるので、今後、この点をどのように解決していくかが検討課題である。

◆弥生時代における青銅器生産の総合的研究
代表者・難波 洋三　基盤研究（B）新規

2013年度は、漢鏡、辰馬考古資料館所蔵銅鐸、兵庫県立考古博物館所蔵古津路出土銅剣のICP分析を実施した。中国産鉛を含む銅鐸の中でも最古の外縁付鈕１式末の２個を分析した結果、鉛の朝鮮産から中国産への変化と錫濃度の顕著な低下およびヒ素・アンチモン濃度の上昇が連動しており、両者の変化に時間的前後がないことを明確にできた。これは、製品や中古品を鋳つぶして銅鐸を作ったのか、インゴットを調合して作ったのか等を解明するための重要な手がかりとなる。また、古津路出土銅剣の分析によって、中細形銅剣ｂ類が、新しい特徴を持つ10号銅剣も含め、外縁付鈕１式末よりも古い型式の銅鐸と同時期に製作されたことが判明した。これは、今後、銅鐸と青銅製武器形祭器の併行関係を考える定点となるであろう。

◆文化財および美術工芸材料のナノ構造と物性・機能の解明
代表者・北田 正弘　基盤研究（B）新規

高松塚古墳試料では、漆喰（東側石３－２間等）表面に形成された茶色層のナノ構造を分析した。X線回折像では、カルサイト、粘度鉱物近似化合物、鉄酸化物が検出された。透過電子顕微鏡像では茶色層表面と平行に多数のナノ針状粒子と粒子が観察され、寸法は幅15-200nm、長さが200nm-1㎛である。鉄を含む粘土鉱物系層状化合物とナノ鉄酸化物からなる。これらがコロイド状粒子となって一部が漆喰の表面上で静電結合等により沈着している。日本刀では刃のマルテンサイトと非金属介在物の微細構造、顔料では油絵具のローシェンナ等の微細構造をあきらかにした。

◆東アジアを中心とした名勝地の保護に関する研究
代表者・平澤 毅　基盤研究（B）新規

本研究は、日本における名勝地保護に関するこれまでの調査研究実績をふまえ、広く東アジア地域諸国等の現状を把握し、それらの保護および周辺地域を含んだ保全に関する施策や実践等の比較研究をおこなうことにより、各国の名勝地保護の取組等の交流を促進し、名勝地概念とその実践を共有することを目的とする。

2013年度は、国内では北海道・沖縄県等における現地調査のほか、講演等を通じたて調査研究趣旨の普及に取り組み、また、海外では韓国・台湾における名勝地保護等の基本的な情報の収集とともに関連諸学会等との研究交流、個別事例について現地調査等をおこなった。

◆古代律令国家の官衙と寺院の占地に関する比較研究
代表者・小澤 毅　基盤研究（C）継続

本研究は、日本の古代律令国家における官衙と寺院がいかなる場所に造営され、占地上、どのような関係を有していたかを検討することで、立地面の特性とそれが果たした政治的な役割を解明することを目的としている。最終年度にあたる2013年度は、畿内および東海道・北陸道諸国の官衙・寺院遺跡を主な対象に、資料の収集と分析を継続した。そして、地域ごとの特色のほか、遺跡の種類や性格の違いによる立地上の特性を比較し、研究成果の取りまとめと総括をおこなった。

◆中国における木質文化財の用材観
代表者・伊東 隆夫　基盤研究（C）継続

今年度は中国由来の神像の樹種同定をおこなった。初年度の結果ではヤマナラシ属の一種とクスノキが大半の神像に使用されていた＊が、2013年度の調査ではそれを裏付けるようにヤマナラシ属の一種とクスノキが多くの神像に用いられていることが判明した。

＊Mechtild Mertz and Itoh Takao, Alain Arrault (ed.), Religions et société locale, *Cahiers d'Extrême–Asie* 19: 183–214 (2010).

◆古代東アジアにおける土木技術系譜の復元的研究
代表者・青木 敬　基盤研究（C）継続

本研究は、日本の古墳時代～奈良時代における寺院・官衙・墳墓に用いられた土木技術を復元し、同時に中・韓の類例を収集し、相互を比較検討することによって、東アジア的視野で土木技術系統を分類し、その成立と展開について歴史的評価をおこなうことを目指す。

２年目となる2013年度は、前年度に引き続き、寺院・官衙・墳墓を中心に日・中・韓の土木技術関連資料を収集した。さらに訪韓し、現地研究者と土木技術の類例や歴史的意義についての意見交換、および資料収集をおこなった。日本国内でも各地の古墳・寺院・官衙・宮殿の発掘調査現場を訪れ、発掘遺構の検討や調査担当者との意見交換等をおこない、多くの知見を得た。

特に資料収集がすすんだ古墳の墳丘築造技術については、列島内での技術系統の弁別が可能となり、少なくとも大型古墳は、墳丘構築技術から編年できる見通しを得た。この成果については、「蒲原平野の王墓古津八幡山古墳を考える―1600年の時を越えて―」（新潟市）、「蓮山洞古墳群の成果と意義」（韓国・釜山市蓮堤区）で口頭発表した。

◆中世日本と東アジアの木造建築における架構システムに関する比較研究
代表者・鈴木 智大　基盤研究（C）継続

本研究は、木造建築の架構システムに着目し、日本・中国・韓国の比較をおこなうことで、東アジアにおける木造建築の設計論理を解明する試みである。

４ヶ年計画の２年目となる2013年度は、大仏様建築の源流と指摘されてきた中国福建省の建築について、重点的に考察をおこない、「甘露寺と福建省の古刹」（『鳥取環境大学紀要』12、2014年）、「黄檗様建築と中国建築の穿挿枋」（日本建築学会大会学術講演、2014年予定）として、論考をまとめた。また、本研究に先行する最も体系的な研究といえる関口欣也氏の著作集について、その書評を『建築史学』62（2014年）に発表した。

◆東アジアにおける鉛釉陶器の原料とその時間的・地域的特徴に関する研究
代表者・降幡 順子　基盤研究（C）継続

本研究は、鉛釉の生産に供給される原材料の変遷、さらに時代とともに変化する製品構成との関連と生産技術を究明することを目的とする。2013年度は平城宮および平城京から出土した施釉瓦について、奈良時代前半と後半とで胎土や鉛釉の原材料に相違があるのかどうか検討をおこなった。また、８世紀に比定される鉛ケイ酸資料について、鉛同位体比値が集中する範囲（グループⅠ）を超えて重複せずに別の数値範囲でまとまる資料を確認しているため、これらの資料について精査した。さらに渤海地域から出土した鉛釉陶器の分析と解析をおこなった。

◆平安時代出土文字資料の動態的歴史分析―〈荷札の終焉〉にみえる木簡の機能
代表者・山本 崇　基盤研究（C）新規

本申請研究は、平安時代木簡の性格と機能を律令制の変質過程のなかで合理的に説明することを課題としている。2013年度には、兵庫県、静岡県、鳥取県、熊本県等の平安時代出土木簡・墨書土器を対象として熟覧調査と写真撮影をおこなった。また、全国出土の平安時代木簡の全体像を把握する作業を開始し、その成果をもとに『全国木簡出土遺跡・報告書綜覧Ⅱ』（埋蔵文化財ニュース154号）を編み公表した。

◆日本列島後期更新世洞穴遺跡の立地と利用に関する研究

代表者・渡辺 丈彦　基盤研究（C）新規

本研究は、国内の旧石器研究において俎上にのることの少なかった洞穴遺跡を研究対象とし、その詳細な立地と周辺の自然環境、洞穴の形状やその形成過程等を、客観的なデータとして把握・類型化し、それぞれの類型での洞穴利用のあり方をあきらかにすることを目的としている。2013年度は、すでに基礎的な整備を終えていた日本列島内の洞穴遺跡のデータベースについて、発掘調査報告書・聞き取り調査の結果にもとづいて点検・補訂の作業をおこなうとともに、次年度以降に予定している現地調査の準備もおこなった。また、その成果の一部について学会発表等をおこなった。

◆ツガ年輪による近世以降の建造物の年代測定および用材産地推定手法の確立

代表者・藤井 裕之　基盤研究（C）新規

過去２回の試行的な研究を発展継承した新規課題である。これまでの近畿、四国を中心とする西日本方面に加えて、新たに東日本や九州まで範囲を広げ、ツガ利用物件の探索とそれに関連する年輪調査を開始した。古材と現生材とのパターン接続は、2013年度も未達成に終わった。しかし、双方のパターンの延伸作業は、７月の日本文化財科学会第30回大会で発表した高知城現用木部材と同調するものを中心に進行している。両者の接続は、今後四国産材のデータにより実現される公算が大きい。

◆東北アジアにおける金属器の拡散と在地社会の変化に関する考古学的研究

代表者・庄田 慎矢　若手研究（A）継続

本研究は、近年暦年代の根本的な見直しが進む東北アジアにおける金属器拡散のシナリオを再構成し、同地域における金属器受容の特性を人類史的に位置づけようとするものである。３年目となる2013年度は、金属器の拡散とともに変化する石製装身具に注目し、その種類や製作技術の検討を行おこない、その内容を論集『青銅器時代の考古学』や図録『先史・古代玉の世界』に掲載した。また、金属器の拡散とともに出現したと考えられるロシア沿海地方出土の武器形石器の写真・実測図を集成したカタログを作成した。

◆東アジアにおける「西のガラス」の流通からみた古代の物流に関する考古科学的研究

代表者・田村 朋美　若手研究（A）新規

本研究は、化学分析を通して、日本列島の遺跡から出土する「西のガラス」の生産地を推定し、ユーラシア大陸の東西を結ぶ交易ルートの解明と、その時期変遷をあきらかにすることを目的とする。2013年度は、追戸Ａ－１横穴墓（宮城県涌谷町）出土のトンボ玉について、蛍光Ｘ線分析法による元素分析やＸ線回折法によるガラス中の白色顔料の同定を実施した。近年、本資料と類似の朝鮮半島出土のトンボ玉について、製作技法やモチーフの類似性からインドネシアのジャワ島産である可能性が提起されているが、本資料に関しては、化学分析の結果、地中海周辺から西アジアにかけての所謂「西方地域」で製造された可能性が高いことがあきらかになった。

◆奈良時代の中央と地方における建築技術の研究

代表者・海野 聡　若手研究（B）継続

2013年は、奈良時代の倉庫や井戸の部材を主な対象に検討したところ、倉庫には特有の設計概念が存在し、井戸の部材には多くの建築部材が再利用されていた。また、奈良時代に建物をどのように認識していたか、あるいは管理上、どのように記述していたかを整理し、その特徴をあきらかとした。これらの成果を日本建築学会の口頭発表や審査付論文、埋蔵文化財研究集会における発表を通じて、広く公開した。

また、2013年は研究課題の最終年度にあたり、４年間の成果を研究冊子の刊行を通じて、周知することができ、計画通り、順調な研究成果をあげられた。

◆木彫仏像を中心とした日本彫刻史研究における年代決定法の調査・研究

代表者・児島 大輔　若手研究（B）継続

本研究は仏像を中心とする木彫像の自然科学的な調査成果と従前の美術史的手法によって得られた年代観とを対照することで、彫刻史研究における制作年代推定の確度を高めるとともに、木材利用のあり方等を探求することを目的としている。2013年度はアメリカ・ミルウォーキーにおいて中国明・清時代から民国時代にかけての神像200躯を対象とした樹種同定調査を客員研究員伊東隆夫、ハーバード大学教授ジェイムズ・ロブソン氏と共同でおこなったほか、カヤ材に対する年輪年代法の活用を目的として唐招提寺新宝蔵の旧講堂の木彫仏群の調査等をおこなっている。

◆GT-Map等時空間解析システムを利用した木簡等出土文字資料分析の基礎的研究

代表者・馬場 基　若手研究（B）継続

国・郡地名の数値データ化をおこない、ほぼ終了した。また、平城宮・京内の木簡出土遺構の位置情報の整理をおこなった。これらの情報は、『木簡字典』データベースを通じて公開している。

そして、これらの数値化データの時空間分析に着手した。分析は、高田祐一氏が特許を有する分析支援システムによる。なお、当初予定していたGT-MAP等ではなく、本システムを採用した理由は、高田祐一氏が現在奈文研に勤務しており、技術的支援を受けやすいためである。

◆三次元計測による飛鳥時代の石工技術の復元的研究

代表者・廣瀬 覚　若手研究（B）継続

本研究は、三次元計測の手法を用いて、飛鳥時代の石材加工に関するデータを収集し、当該期の石工技術を詳細かつ体系的に復元することを目的とする。2013年度は、一昨年度、昨年度実施した香芝市平野塚穴山古墳、および羽曳野市野中寺所在のヒチンジョ池西古墳の横口式石槨のデータ修正をおこない、あわせて飛鳥・奈良時代の加工石材（飛鳥寺、薬師寺等）にたいする調査を実施した。最終年度となる2014年度は、補足的に数カ所の計測を実施し、これまでの研究を総括する予定である。

◆古代における骨角製品の動物考古学的研究

代表者・丸山 真史　若手研究（B）継続

本研究は、古代から近世の骨角製品について、生産体制や生産者（職人）の社会的立場の変遷をあきらかにすることを目的としたものである。2013年は、研究最終年にあたり、主要な骨角製品の出土遺跡に注目し、古代から近世にかけての器種や素材となる動物種の変遷について総括し、その成果は韓国忠北大学校の国際ワークショップにおいて発表した。また、大坂城下町跡の双六の駒製作関連資料について加工痕を中心に分析し、その成果は動物考古学会において発表した。

◆南洋群島の戦争遺跡の保存と活用：特に水中文化遺産に重点を置いて

代表者・石村 智　若手研究（B）継続

本研究はパラオをはじめとする南洋群島における日本統治時代および第二次世界大戦に関連した戦争遺跡の調査をおこない、その保存状況を記録し、その活用法を探ることを目的とする。2013年度は、昨年度までにパラオで調査した遺跡に関連した日本側の情報の収集に重点を置き、特にパラオ引き揚げ者およびその家族の方を対象に聞き取り調査をおこない、当時の状況についてデータ収集をおこなった。また、パラオに所在する沈没艦船の来歴調査を実施し

た。

◆弥生時代の地域間関係と青銅器の受容
代表者・石橋 茂登　若手研究（B）継続
本研究は弥生時代の青銅器を主な分析対象として、遺物の移動を通じて青銅製祭器の受容の実態をあきらかにすることを目的とする研究である。
本年度はデータ収集、青銅器出土地の調査等をおこない、福岡県、岡山県等で資料調査を実施した。また、朝鮮半島における武器形青銅器の使い方、漢系文物の受容の様相から日本での青銅器の使用法や大陸製文物の受容の様相について整理考察した。成果は論文として発表する予定である。本年度は代表者の勤務異動ともなにい当初計画より作業が遅滞した。次年度は精力的に研究をすすめたい。

◆甲冑編年の再構築に基づくモノの履歴と扱いの研究
代表者・川畑 純　若手研究（B）継続
本研究の目的は、古墳時代の甲冑編年を型式学的な分析視点から再構築し製作順序を仮定することで、資料の製作順序と一括資料中における扱いとの間に関連があるのかどうかをあきらかにすることである。
2013年度は2012年度に引き続き関連資料のデータの収集を中心に進めた。本年度の作業によりデータベースの骨格が完成し、実見・検討が必要な資料についても概ね把握ができた。今後はそれを元に計画的な資料調査が遂行できると考える。また、宮崎市埋蔵文化財センターでの資料調査をはじめとして資料の実見・検討をおこなった。

◆茅葺屋根の多様性とその成立過程に関する研究
代表者・黒坂 貴裕　若手研究（B）継続
2013年度は茅葺道具の調査および写真撮影をおこなった。まず、青森県に所在する旧笠石家住宅（十和田市、重要文化財）において、屋根修理の際に用いた茅葺道具を調査した。ここでは茅葺コテの変遷のうち、古い段階のワラゴテをはじめとして、タタキ板、ツキゴテの各段階のコテを確認した。また、京都府に所在する美山民俗資料館では、茅葺ハサミのうち、古い形式のヨコバサミ（反りのないハサミ）を確認した。以上のように、現在では使われない古式の茅葺道具が民俗資料館等に残されていることから、茅葺道具の変遷を遡る研究について可能性が広がった。

◆装飾古墳を安定に保存するための環境制御法の開発に関する研究
代表者・脇谷 草一郎　若手研究（B）新規
本研究では、互いに近接する３基の装飾古墳において、墳丘直上の微気象観測、および石室内温熱環境調査を実施することで、墳丘の被覆状況が石室内の結露性状に与える影響について検討する。古墳の石室石材において、結露は主たる劣化要因と考えられることから、実測調査の結果と、墳丘および室内空気における熱水分移動の数値解析に基づいて、石室内における結露を抑制し、古墳の保存環境として望ましい石室内温熱環境を実現、維持する手法を検討することを目的とする。初年度となる2013年度は３基の古墳において上記の実測調査を開始した。

◆古代東アジアにおける食器構成と食事作法の変化に関する比較研究
代表者・小田 裕樹　若手研究（B）新規
本研究は、飛鳥時代後半から奈良時代にみられる「律令的土器様式」の成立・展開とその歴史的背景について、東アジア諸国における食器構成と食事作法の変化との比較という観点からあきらかにすることを目的とする。
研究初年度にあたり、古代都城周辺の出土食器資料の集成作業をおこなった。また、韓国において扶余地域出土台付椀の実見調査をおこなった。研究成果の一部については論文を執筆し、2013年11月の大韓民国国立文化財研究所との共同研究中間発表会および12月の都城制研究会にて口頭発表をおこなった。

◆古代日本の宮都、寺院出土磚の基礎的研究
代表者・中川 二美　若手研究（B）新規
本研究の目的は、磚の日本列島内での導入過程をあきらかにし、古代社会の手工業生産体制の一端を解明することである。磚の多くは型枠を用いて生産されており、個別資料の規格の有無を探りやすい上、使用に向けた計画性を踏まえた生産を想定できる資料である。このため、消費地と生産者の情報共有についても検討しやすいと考えられる。
2013年度は宮都を中心に出土した磚資料の集成をおこない、風蝕痕跡等から積磚か敷磚か等の使用方法を整理と分類をおこなった。また、基壇外装として使用される磚の集成にも取りかかり、分析を進めている。

◆中国殷周王朝における馬匹生産体制の動物考古学的研究
代表者・菊地 大樹　若手研究（B）新規
本研究は、古代東アジアにおける馬文化の基点であった、中国殷周王朝における、馬の飼養管理から利用にいたる体系化を目的とする。そして、それに関わる社会階層といった、馬を利用する人間の視点にた、その意味づけを検討するものである。
初年度は、基礎的データ集積を目的に、６月には、吉林大学辺疆考古研究センター所蔵の井溝子遺跡出土馬骨、９月には、陝西省考古研究院の協力を得て、少陵原西周墓地、漢陽陵陪葬坑出土馬骨の調査をおこなった。その成果の一部は、日本ウマ科学会と日本中国考古学会にて発表した。

◆大工道具とその加工痕跡から見た建築技術史の研究
代表者・番 光　若手研究（B）新規
本研究は、大工道具伝世品資料および建築部材に残された加工痕跡から、近世以前の木造建築および部材加工技術の特質についてあきらかにしようとするものである。2013年度は建築および民家に関する辞典類から大工道具の名称の収集をおこなった。木奥家所蔵大工道具の再検討をおこない、名称が確認できていなかった５点について、道具の用途と名称が判明した。大工が使用した道具には定型化されたものと、作業や部材寸法にあわせて現場で製造・改造したものがあり、後者は名称の確定が難しいが、実際の造営技術により具体的に迫れる。

◆重要文化的景観の評価方法と保護手法における現状と課題
代表者・惠谷 浩子　若手研究（B）新規
本研究は、重要文化的景観の価値付けの方法と、価値と保存計画の整合性について全選定事例を俯瞰し、そのあり方を詳細に整理・分析することで、文化的景観保護制度の明瞭化へ貢献することを目的とする。
2013年度は、各調査報告書・保存計画書を入手して情報収集と整理をおこなうとともに、まとめの方向性について検討した。また、現地詳細調査は次年度以降に実施する予定であるが、限られた期間を有効に活用するため、現段階で情報収集を終えている２地域（群馬県板倉町・大分県別府市）について先行して現地調査を実施した。

◆近世における石材生産と運搬に関する広領域史的情報の資源化と実証的研究
代表者・高田 祐一　研究活動スタート支

援　新規

本研究の目的は、文献史料・考古資料を含めた史的情報を資源化し、有効な活用方法を模索することである。実証的研究として近世における石材生産と運搬の実態解明をテーマとしている。

2013年度は、兵庫県・香川県の文書館、宮内庁宮内公文書館にて史料の写真撮影・翻刻を実施し、データ入力を進めた。宮内公文書館では、前近代の石材産業解明に資する文書群の存在を確認した。また、香川県小豆島の石切場を現地調査することで現地の痕跡と文献史料との整合性を検証した。その結果、幕末期から大正期にかけての石切場利用の実相をあきらかにした。

◆レリーフフォト法を応用した木簡文字鮮明化の研究　―平城宮出土木簡を中心にして

代表者・中村 一郎　奨励研究　新規

遺跡から出土する木簡の多くで見られる墨書が判読困難な資料を、これまで採用してきた赤外線リフレクトグラフ等の光学的調査法に加えて、デジタル画像処理による、位相差検出技術を応用したレリーフフォトグラフ技法を組み合わせ、墨書部分を鮮明化する研究である。

位相方向のコントロールにより、木目を目立たせずに墨書のみを明瞭にする技法等新たな知見を得られた。また、中国地方や九州等各地の木簡資料を熟覧・撮影する中で地方ごとの土壌成分による不明瞭木簡の釈読に新たな成果をもたらす事につながる研究で、今後、さらなる技法の確立を検討したい。

◆飛鳥藤原・平城京木簡と古代の地方木簡の字形比較

代表者・井上 幸　奨励研究　新規

木簡にみえる各字形を対象とし、これまで取り組んだ都城の木簡から、都城以外の地方から届いた木簡に注目し、観察した。また、地方の遺跡から出土した木簡の字形を加えた。見学、資料収集として、静岡県伊場遺跡に行き、中国では文字に関連する文献を収集した。これらの成果のうち、「茂」字の「戊」の部分を取りあげ、韓国日本文化学会で報告した。都城と地方での文字使用の相違点が、中国や朝鮮半島での文字使用とどちらが近いか等、今後検討したい。

◆異宗教の相剋により生じた社会現象の比較史的研究―古代仏教説話に見る伝統と革新

代表者・立命館大学文学部教授　本郷 真紹（山本 崇）基盤研究（C）継続

本申請研究は、『日本霊異記』を対象に検討を進めてきた前採択課題を引き継ぎ、神仏習合等の諸現象が古代社会に与えた影響を、東アジア世界の同時代史との関係で再構築することを目的としている。2013年度は、『日本霊異記』中巻下巻説話の検討を進めたほか、『考証日本霊異記上』（法藏館、2014年度刊行予定）の再校原稿を戻し刊行準備を進めた。また、富山県の古代山林寺院、仏教民俗資料等の現地調査をおこなった。

学会・研究会等の活動

◆文化財写真技術研究会

2013年７月５・６日に第４回（通算25回）文化財写真技術研究会の総会と研究集会を奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂において開催した。

１日目：総会・研究会Ⅰ　写真資産の利活用～文化財写真の著作権を考える～

講演「著作権の基礎知識」（所　昌宏氏；文化庁長官官房著作権課）

２日目：発表「最近のデジタル事情」（玉内公一氏；テクニカルアドバイザー）

報告「埋蔵文化財写真撮影の標準仕様検討WG中間報告」（栗山ほか）

研究会Ⅱ　写真資産の利活用～写真を活かす実例～

発表「文化財画像データの利活用」（中上喜夫氏；日本写真印刷株式会社）、「正倉院事務所におけるデジタル画像の利用」（北田仁司氏；宮内庁正倉院事務所ー）、「写真を活かすレイアウトの基本」（西田優子氏；遊覧船グラフィック）

今回は、「デジタル文化財写真の本格運用」（撮影）「デジタル文化財写真の保存」（保存）に続く締め括りとして「写真資産の利活用」（活用）をテーマに研究会を開催した。その内容は、著作権法における文化財写真の位置づけから、画像データの利用法やレイアウトにおよぶ。デジタル化が決定的となった現在、文化財写真を取り巻く環境は変革の時期を迎えており、３期にわたる連続企画を通じて、次のステップへ歩みを進める知識を共有する機会になった。（栗山 雅夫）

◆日本遺跡学会

2013年10月５・６日に、函館で2013年度大会を開催した。今回の大会では、2013日本遺跡学会函館大会実行委員会を編成し、函館市教育委員会の協力を得て、「北方の文化と遺跡」をテーマとして、１日目に函館山山頂クレモナホールで講演と事例報告、２日目にレクチャー・エクスカーションという新たな構成により一般公開のかたちで開催した。

初日は、畑宏明実行委員長の開会宣言、田辺征夫学会長の開会挨拶、山本真也函館市教育委員会教育長の歓迎挨拶の後、菊地徹夫氏（早稲田大学名誉教授）の記念講演「北方の文化と遺跡の魅力」のほか、長沼孝氏（北海道教育庁）の「北海道の記念物～道南を中心に～」、松崎水穂氏（函館市文化財保護審議会委員）の「北海道における中世の記念物」、田才雅彦氏（北海道教育庁）・工藤義衛氏（石狩市教育委員会）の「名勝ピリカノカ（美しい形）」の３つの事例報告があった。

２日目は、「レクチャー・エクスカーション～函館の史跡～」として、函館市内の各所を巡りながら、現地での報告を展開した。特別史跡五稜郭跡では野村祐一氏、史跡志苔館跡では吉田力氏、史跡大船遺跡では阿部千春氏、史跡垣ノ島遺跡では福田裕二氏（以上４名につき函館市教育委員会）、また、史跡垣ノ島遺跡に隣接する函館市縄文文化交流センターにおいては、坪井睦美氏・樋口五月氏（NPO法人函館市埋蔵文化財事業団）から報告・質疑応答があった。

なお、学会誌は『遺跡学研究』第10号（特集１：大和の世界遺産と遺跡、特集２：「遺跡学」とは何か）を刊行した。

（平澤 毅）

◆木簡学会研究集会

2013年12月７・８日、第35木簡学会総会・研究集会を、平城宮跡資料館講堂・小講堂において開催した（参加者165名）。

７日は、上川通夫氏（愛知県立大学）「12世紀の起請木札―普門寺（愛知県豊橋市）の永暦２年（1161）永意起請木札」、上島享氏（京都大学）「起請木簡と起請文」の２本の研究報告と、関連する濱修氏「塩津港遺跡の発掘調査と木簡（続報）」の紹介があった。

８日は、山本崇氏「2013年全国出土の木簡」で全国出土の木簡を概観した後、西山良平氏・吉野秋二氏・鈴木景二氏「平安京跡跡右京三条一坊六町（西三条第）の調査と出土木簡・墨書土器」、谷正俊氏（神戸市教育委員会）「深江北町遺跡（第12次・14次）の発掘調査と木簡・墨書土器」、山枡雅美氏（鳥取県埋蔵文化財センター）「青谷横木遺跡の発掘調査と出土木簡」の３本の事例報告で最新の出土情報にふれることができた。

なお、会誌『木簡研究』第35号を編集・刊行した（編集担当：山本祥隆）。

（渡辺 晃宏）

◆古代瓦研究会

2014年２月８日、９日に第14回シンポジウム「８世紀の瓦づくりⅢ―平城宮式軒瓦の展開１　6225-6663系―」を、奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂において実施した。

２月８日は、石田由紀子氏「平城宮の6225-6663型式軒瓦」、原田憲二郎氏「平城京内出土の6225・6663系軒瓦」、近藤康二氏「河内・和泉の6225-6663型式・系軒瓦」、松尾佳子氏「中国地方（山陽地域）の6225-6663系軒瓦」、翌９日午前中は、平野吾郎氏・大川敬夫氏「片山廃寺出土の瓦」、森本剛氏「関東地方の6225-6663系関連資料―上総国6225-6691系軒瓦について―」の発表および関連資料の観察会がおこなわれた。９日午後には、それらの発表にもとづき、清野孝之氏を座長として総合討議をおこなった。２日間の参加者数は105名である。

また、2011年度第12回シンポジウム、2012年度第13回シンポジウムの成果をまとめた「古代瓦研究Ⅵ―大官大寺式・興福寺式・鴻臚館式軒瓦の展開―、―重圏文系軒瓦の展開―」を、2014年２月６日に刊行した。（渡辺 丈彦）

◆条里制・古代都市研究会

2014年３月１・２日の両日、第30回条里制・古代都市研究会大会が「最近10年の条里制・古代都市研究」をテーマとして、奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂にて開催された。述べ参加者数135名。

１日目は、岸本直文「７世紀後半の条里施行と郷域」、積山洋「難波宮・難波京研究の新展開」、井上和人「平城京左京南辺特殊地区再論」の３本の報告があり、最後に討議がおこなわれた。２日目は調査レポートとして、小池伸彦「平城京左京三条一坊出土鍛冶工房跡の調査と平城宮・京の冶金工房」、高野陽子「丹波国府周辺の条里関連遺構」、山本悦世「岡山平野の条里と鹿田遺跡の地割り」、福田秀生「福島県桜田Ⅳ遺跡の発掘調査成果」、吉野武「多賀城跡の近年の調査」の５本の報告があり、報告内容に対して活発な質疑と討論がおこなわれた。（小田 裕樹）

国が実施する事業等についての調査・協力

●平城宮・京跡の整備

2012年度に引きつづき、国土交通省や文化庁による各種事業に対して、調査研究・協力・専門的見地からの助言をおこなった。

平城宮跡内では、国土交通省が計画した中央区朝堂院地区の休憩施設、第一次大極殿院南西の復原事業情報館の各建設予定地において発掘調査をおこなった。また、大極殿院西面回廊におけるボーリング調査をはじめ、整備用道路の補修等に対して、地下遺構への影響がないかどうかを確認する立会調査をおこなった。

また、2012年度に引きつづき、朱雀門の南東に国土交通省が計画した平城宮跡展示館予定地の発掘調査をおこなった。

一方、文化庁が主催する遺構展示館の露出展示改善に関する検討委員会に出席し、遺構展示館内の温熱環境、劣化状態、保護施設としての覆屋が有する問題点について実施した調査結果を報告した。

平城宮跡の利活用および整備に関して、文化庁が主催する平城宮跡保存・活用連絡協議会、国土交通省が主催する平城宮跡第一次大極殿院建造物復原整備検討委員会に出席し、専門的・技術的な援助や助言をおこなった。このほか、平城宮跡の発掘遺構等に関する各種情報を提供した。

第一次大極殿院の復原整備関連では、2010年度からおこなってきた復原原案の作成について、2013年度には所内検討会を11回開催し、各部の検討を進めた。この成果から作成した復原案および復原根拠等について、建築史関係の有識者を招いた検討会を２回開催した。これらによって、基本設計に当たる復原原案はほぼ固まり、文化庁が開催する復原検討委員会に2013年度は３回諮った。また、古代の塗装に関する研究として、塗装の溶剤や木地固めの仕様等を変えた試験体を作成し、暴露試験をおこなうとともに加速劣化試験を実施している。

今後は、基本設計には表れない細部の設計や、瓦・鴟尾、彩色・塗装、飾金具の検討等を進める予定である。（箱崎 和久）

第一次大極殿院復原建物検討会
（平成25年９月30日開催）

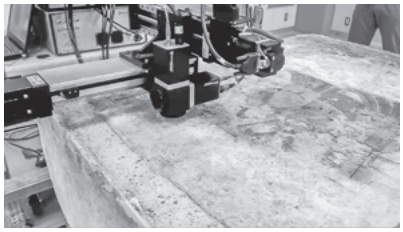
●高松塚古墳壁画の保存修復のための材料調査

高松塚古墳壁画は、国営飛鳥歴史公園内に設置された仮設修理施設において、現在、クリーニング等の作業が実施されている。壁画の保存修復においては、石材、漆喰および彩色材料等に対する調査をおこない、その材料、劣化状態および劣化原因に関する情報を得ることが重要である。

2013年度は、劣化原因調査および修復のための継続的な材料調査として、蛍光X線元素分析と可視分光分析による東壁女子群像および西壁女子群像の色料の推定をおこなった。東壁女子群像のうち、緑色衣人物像がもつ“さしば”の赤色および赤色衣人物像の襟の赤色は鉄系赤色顔料であると推定された。いっぽう、赤色衣人物像の衣の赤色については、まだ可視分光分析において鉄系赤色顔料の特徴を見出すことができず、特定にはいたっていない。今後の精査が必要である。また、西壁女子群像の中で、紺色裳が紺色と紫がかった色のひだの繰り返しになっている可能性を示した。裳の部分からは全体に銅が検出されていることから、群青をベースとするものの、紫がかった部分については何らかの赤色の色料を混色している可能性がある。この赤色の色料は現状ではきわめて微量にしか残っていないため、その種類を特定するにはいたっていない。また、漆喰の状態を調査するため、西壁３に対してテラヘルツ波イメージングをおこなった。その結果、石材と漆喰の界面における剥離、漆喰層の多孔質化、強化処置のために過去に使用されたアクリル樹脂の分布等を可視化することができた。

経年変化の記録撮影として、東壁３石、西壁３石、天井石４石ならびに北壁に対して可視光と赤外光によるデジタルアーカイブスキャニングを実施し、800dpiの高精細画像を取得した。紫外光によるスキャニング技術の開発については、スキャン速度と検出感度の向上により、スキャニング時に資料に照射される紫外線の積算強度を大幅に低減することに成功した。

（髙妻 洋成）



壁画の材料調査

●キトラ古墳に関する調査研究

キトラ古墳関係の事業では、石室の埋め戻し作業に入る前の最終的な考古学調査と、保存科学調査を実施した。

考古学調査では、2002・2003年度調査の埋め戻し土を除去し、墓道部を再検出し

て３次元レーザー測量を実施した。また、墓道部に発掘せずに保存した墓道埋土（版築層）の土層断面の剥ぎ取り作業をおこなった。墓道部の再精査では、地割れ痕跡、柱抜き取り穴、梃子穴が確認できた。

地割れ痕跡は、石室の閉塞石（南壁石）から約２ｍ南で、墓道部を東西に横断する。検出した地割れ痕跡は、幅60㎝、深さ30㎝以上でＶ字状に開くと考えられ、内部には上部の版築が落ち込んでいる。地割れの南側では、墓道床面が25㎝ほど沈下しており、コロレール痕跡が高さを違えて検出された。高松塚古墳と同じく、90～150年周期で近畿地方を襲う南海地震の爪痕と考えられる。

また、2003年度の調査で、石室のすぐ南で検出していた柱穴SX504・505において、柱の抜取穴を確認した。柱穴の大きさは65～80㎝、深さは20㎝。抜取穴の大きさから、柱の太さは10㎝ほどであったと推定できる。コロレール痕跡との重複関係から、石室を閉鎖した後に穴を掘り、柱を立てたことがわかる。柱を立てた目的は不明であるが、墓道を埋める直前の墓前祭祀に関わるものである可能性が考えられる。

南壁石南面下辺の西寄りでは、新たに梃子穴の一部を確認した。その位置は、南壁石西端から30㎝ほど東で、南壁石と床石の間に詰められた漆喰にわずかな隙間がみられ、その存在を確認することができた。これまでの調査でも、南端天井石の東西両側面に梃子穴を確認していたが、今回、南壁石の下辺にも梃子穴が存在することが判明した。

発掘調査により出土した遺物に関する事項では、2004年の発掘調査時に石室内から出土した骨片のうち、報告書未掲載の小破片を対象に約10箱分の資料について、クリーニング・樹脂による仮強化処理・仮保管ケースの作成をおこなった。また、出土した遺物の点検作業をおこなうとともに、収蔵庫の温度湿度モニタリング、調湿剤等の交換作業を実施した。

壁画の保存・活用に関する事項では、マクロ分割撮影による表面状態の調査を、玄武・青龍、朱雀、白虎について実施した。高松塚古墳壁画と同様の乳白色物質が表面に薄く認められた。蛍光Ｘ線元素分析では朱雀の下地漆喰の鉛の分布を測定した。高松塚古墳壁画で認められる図像とその周辺部における鉛の検出強度が大きくなるということは認められなかった。また、尾羽の斑文様部は銅を含む顔料により着色されている可能があることがわかった。分光分析は朱雀の反射分光スペクトル測定をおこなった。赤色部では辰砂に特徴的な反射スペクトルが得られた。テラヘルツ波イメージングは、漆喰の状態および泥に覆われている部分の情報を得るために朱雀に対して実施した。得られた断層画像から泥の部分の輝度が高く表され、漆喰層が多孔質化している部分を示すことができた。

（若杉 智宏　降幡 順子）

キトラ古墳墓道部版築層の剥ぎ取り

発掘調査現地説明会・見学会

◆平成25年9月7日（土）

飛鳥藤原第177次（甘樫丘東麓遺跡）
発掘現場現地見学会
都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）
参加者1,122人　　調査面積1,038㎡

◆平成25年9月28日（土）

平城第516次（興福寺西室）
発掘調査現地見学会
都城発掘調査部（平城地区）
参加者885人　　調査面積985㎡

◆平成25年12月21日（土）

飛鳥藤原第179次（藤原宮朝堂院朝庭）
発掘調査現地説明会
都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）
史料研究室　桑田 訓也
参加者337人　　調査面積1,430㎡

◆平成26年2月15日（土）

平城第519次（薬師寺十字廊）
発掘調査現地説明会
都城発掘調査部（平城地区）
考古第一研究室　庄田 慎矢
参加者350人　　調査面積872㎡

現説・見学会

◆平成26年3月8日（土）

平城第520次（平城宮跡第一次大極殿院）
発掘調査現地説明会
都城発掘調査部（平城地区）
遺構研究室　海野 聡
参加者715人　　調査面積476㎡

2 研修・指導と教育

文化財担当者研修と指導

文化財の保存・活用を推進し、国民に対するサービスの向上をはかるため、地方公共団体等の文化財担当職員の資質向上を目的とする研修を実施している。2013年度は、専門研修9課程を実施した（2013年度文化財担当者研修課程の一覧参照）。研修の多くは、講義形式が主体であるが、研修後の感想文等によると、実地踏査や実技・実習を取り入れた研修が好評であった。研修総日数64日、研修生総数138名であった。

各部・センターでは、要請に従って地方公共団体や関係機関が実施する発掘調査、出土遺物の保存処理、遺構の保存、遺構整備等に関して、指導および助言等の協力をおこなっている。2013年度の主な協力について一覧を別表に掲載した。このほか、文化庁、地方公共団体、関係機関からの依頼を受けて、発掘調査をはじめ、遺跡・遺物の保存、遺跡の整備および公開に関する調査、地下遺構の探査、動物依存体分析、年輪年代測定等の共同研究や受託研究も進めている。

京都大学（大学院）との連携教育

京都大学大学院人間・環境学研究科共生文明学専攻文化・地域環境論講座文化遺産学分野の客員教員として小野健吉（庭園文化論）・小澤毅（遺跡調査法論、文化遺産学演習）・髙妻洋成（保存科学論、共生文明学演習、文化遺産学特別演習、文化・地域環境特別セミナー）・玉田芳英（文化遺産学演習）・馬場基（史科学論、文化遺産学演習）・山崎健（共生文明学特別研究）の6名がそれぞれの講義等を担当した。

講義では、各教員の専門である、都城・寺院を対象とした歴史考古学、庭園史学、保存科学、文化的景観学、環境考古学等の講義・演習・実習等をおこない、また、文化遺産学を専攻する院生らは、授業以外も主として奈良文化財研究所で研究・実習をおこない、必要に応じて各教員が指導にあたった。2013年度に在籍した院生は修士課程1名、博士後期課程5名（休学を含む）であった。

奈良女子大学（大学院）との連携教育

奈良女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻文化史論講座の客員教授として、杉山洋（歴史考古学特論）・小池伸彦（文化財学の諸問題）・渡辺晃宏（歴史資料論）が担当し、博士後期課程の大学院生の指導をおこなった。

いずれも、飛鳥地域、藤原宮・京跡、平城宮・京跡等の遺跡の発掘調査、坩堝や羽口、金属製品、木簡をはじめとする遺物の調査研究に密着した授業であり、大学における通常の授業では経験できない、奈良文化財研究所ならではの特色ある教育を実践した。

奈良大学への教育協力

2013年度に引き続き「文化財修景学」（担当：文化遺産部遺跡整備研究室）に出講した。遺跡等の保護と整備に関する制度・歴史・理念・手法等について、体系的に講義をおこなった。

2013年度　日本各地の遺跡・建造物等に関する指導・協力一覧（委員の委嘱を受けているもの）

（青森）	三内丸山遺跡　縄文遺跡群
（岩手）	御所野遺跡　志波城跡　中沢浜貝塚
（宮城）	多賀城跡
（福島）	宮畑遺跡
（群馬）	上野国分寺跡　三軒屋遺跡　金井東裏遺跡
（茨城）	水戸市史跡
（神奈川）	橘樹郡衙
（新潟）	吹上・釜蓋遺跡
（石川）	金沢城　旧松波城庭園　真脇遺跡
（福井）	朝倉氏遺跡
（岐阜）	正家廃寺跡　大萱古窯跡群
（静岡）	新居関跡　遠江国分寺跡
（愛知）	東之宮古墳　名古屋城跡　本光寺
（三重）	伊勢国分寺跡　斎宮跡　長谷川家
（滋賀）	慶雲館庭園　敏満寺石仏谷墓跡　日吉神社境内　紫香楽宮跡
（京都）	恭仁宮跡　城陽市史跡　元離宮二条城
（大阪）	百済寺跡　新堂廃寺等　鳥坂寺跡　旧西尾家住宅　観心寺境内　和泉黄金塚古墳
（兵庫）	法隆寺領播磨国鵤荘史跡　和田岬砲台　赤穂城跡　五斗長垣内遺跡　竹田城跡　兵庫県近代和風建築
（奈良）	旧大乗院庭園　平城京左京三条二坊宮跡庭園　中宮寺跡　巣山古墳　大安寺旧境内　唐古・鍵遺跡　五條市伝統的建造物群　菖蒲池古墳　東大寺境内　春日大社境内　薬師寺東塔　香芝市史跡　橿原市伝統的建造物群　飛鳥京跡苑池　宇陀市松山地区伝統的建造物群
（和歌山）	根来寺境内　紀伊山地の霊場と参詣道
（鳥取）	浦富海岸
（島根）	旧堀氏庭園　出雲大社境内遺跡　津和野町伝統的建造物群　三瓶小豆原埋没林
（山口）	宮市本陣兄部家　長州藩下関前田台場跡
（岡山）	第二次山陽遺跡　備中松山城跡　高梁市伝統的建造物群
（広島）	安芸国分寺跡　二子塚古墳
（徳島）	勝端城館跡
（香川）	屋嶋城跡　快天山古墳　丸亀城跡
（福岡）	大宰府史跡　鴻臚館跡　三雲・井原遺跡
（長崎）	鷹島神崎遺跡（海底遺跡）　高島炭鉱
（大分）	大分元町石仏　長者屋敷官衙遺跡　ガランドヤ古墳　法鏡寺廃寺跡
（宮崎）	日向国府跡　蓮ケ池横穴群

2013年度　文化財担当者研修課程一覧

区分	課　　程	実施期日	定員	対象	内容	担当室	研修日数	応募者数	受講者数
専門研修	建築遺構調査課程	6月10日～6月14日	12名	地域の中核となる地方公共団体の文化財担当職員またはこれに準ずる者	発掘調査にかかる建築遺構や出土建築部材に関して必要な、上部構造の専門的知識や発掘方法等についての研修	遺構研究室	5日	10名	10名
	中近世城郭調査整備課程	6月17日～6月21日	16名	〃	中近世城郭の調査研究と整備に関して必要な専門的知識の研修	遺跡整備研究室	5日	25名	25名
	建造物保存活用基礎課程	6月24日～6月28日	16名	〃	文化財建造物の保護行政をおこなうための、文化財建造物に関する基礎、および文化財建造物の保存・活用に関する基礎の習得を目指す研修	建造物研究室	5日	16名	16名
	報告書作成課程	7月11日～7月19日	16名	〃	見やすく読みやすい報告書の作り方と、図録・学術誌編集の基礎に関する研修	企画調整室	9日	35名	27名
	災害痕跡調査課程	9月9日～9月13日	12名	〃	地震、洪水、火山等の災害痕跡を理解するための専門的知識と調査方法を取得することを目的とする研修	環境考古学研究室	5日	13名	12名
	三次元計測課程	9月30日～10月4日	10名	〃	三次元計測の利用に関して必要な専門的知識と技術の研修	遺跡・調査技術研究室	5日	8名	8名
	保存科学基礎Ⅰ（金属製遺物）課程	10月8日～10月17日	10名	〃	金属製遺物の材質および劣化状態に応じた保存処理法の策定、仕様書の作成をおこなうことができるよう、金属製遺物の材質、劣化状態および保存処理に関する基礎知識を習得することを目的とする研修	保存修復科学研究室	10日	11名	11名
	保存科学基礎Ⅱ（木製遺物）課程	10月17日～10月25日	10名	〃	木製遺物の樹種、木取りおよび劣化状態に応じた保存処理法の策定、仕様書の作成をおこなうことができるよう、木製遺物の劣化状態および保存処理に関する基礎知識を取得することを目的とする研修	保存修復科学研究室	9日	15名	15名
	古代・中近世瓦調査課程	10月28日～11月1日	15名	〃	古代・中近世遺跡出土瓦の調査研究に関して必要な専門的知識と技術の研修	考古第三研究室	5日	14名	14名

3 展示と公開

飛鳥資料館の展示

◆春期特別展「飛鳥寺2013」

2013年4月26日～6月2日

1986年に飛鳥資料館では「飛鳥寺」展を開催した。その後も飛鳥寺に関わる調査・研究には様々な進展があり、今回、「飛鳥寺2013」展として、近年の研究成果を中心に展示した。佐川正敏氏（東北学院大学）による記念講演会を開催し、図録第58冊『飛鳥寺2013』を刊行した。

◆秋期特別展「飛鳥・藤原京への道」

2013年10月18日～12月1日

『日本書紀』推古天皇21年（613）に設置が記された「大道」は竹内街道と横大路をさすと一般的に考えられており、2013年はちょうど1400年目にあたる。そこで竹内街道1400年と飛鳥藤原宮跡発掘調査部40周年を記念して、同調査部の成果を主に、飛鳥・藤原京の道に関する調査研究成果を展示した。近江俊秀氏（文化庁）による記念講演会を開催し、図録第59冊『飛鳥・藤原京への道』を刊行した。

◆夏期企画展「飛鳥・藤原を考古科学する」

2013年8月1日～9月1日

遺跡の発掘調査や文化財の調査研究、保存修復をおこなう上で大きな役割を果たす自然科学的手法を応用した調査研究は「考古科学」と呼ばれる。奈良文化財研究所埋蔵文化財センターの多彩な研究成果をもとに考古科学を紹介した。カタログ第28冊『飛鳥・藤原を考古科学する』を刊行した。

◆「発見30周年記念　キトラ古墳壁画特別公開」

2014年1月17日～1月26日

2013年度はキトラ古墳壁画の存在が世に知られてから30年の節目となる。そこでキトラ古墳壁画発見30周年を記念して、文化庁と共催で壁画特別公開を開催した。カタログ第29冊『キトラ古墳壁画発見30周年記念　白虎　玄武　朱雀　青龍』を刊行した。

◆冬期企画展「飛鳥の考古学2013」

2014年2月14日～3月16日

2012年度の飛鳥地域の発掘成果を中心に、国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区内遺跡の発掘調査成果を一同に会して展示した。奈良県立橿原考古学研究所、明日香村と共催。カタログ第30冊『飛鳥の考古学2013』を刊行した。

◆その他

第3回写真コンテスト「神々の山―大和三山のある風景―」（作品展示2013年3月9日から4月14日）、第4回写真コンテスト「飛鳥川の導」（作品展示2013年9月7日から10月6日）を開催し、写真集『飛鳥』を刊行。春のミニ展示「坂田武嗣「風景の記憶」」を2013年5月1日から6月30日まで開催した。奈良・飛鳥を題材とする坂田武嗣氏のイラストをロビーにて展示した。銅鏡の調査と連動して、ミニ企画展「日光男体山のかがやき―山岳信仰奉賽鏡の世界―」を2013年9月10日から9月16日まで開催し、日光男体山出土の青銅鏡154面を展示した。調査成果は研究図録第17冊『日光二荒山神社中宮祠宝物館所蔵男体山頂遺跡出土鏡の研究』として刊行。明日香村活性化事業の夜間照明イベント「飛鳥光の回廊」に参加し、前庭にろうそくを並べ夜間開館した。これらの企画とともに、常設展示の一部リニューアルも実施した。次年度以降は回数より内容を重視して活動したい。

平城宮跡資料館の展示

◆夏期企画展「平城京どうぶつえん―天平びとのアニマルアート―」

2013年7月13日～9月23日

平城宮や平城京で発掘調査で出土した、木製形代、硯、墨画、土製品等、動物が表現された遺物を一堂に集めた展示。特に夏休み期間中の親子連れを意識して、会場を天平時代の動物園に見立てた、親しみやすい展示構成とした。会期中の入館者数は18,616名で、ギャラリーイベントとして、博士のおもしろ動物講座を4回（参加者計110名）、親子ワークショップを2回（参加者計81名）おこなった。

博士のおもしろ動物講座の様子

◆秋期特別展「地下の正倉院展―木簡学ことはじめ―」／「都城発掘調査部　平城宮・京発掘調査の50年」

2013年10月19日～12月1日

年に一度の木簡実物の公開展示。2013年度は木簡研究最初期の様相をテーマとし、今からちょうど50年前に調査された、平城宮跡のSK820と呼ばれるゴミ捨て土坑出土の木簡を軸として、木簡学が大きな成長を遂げていく過程について展示をおこなった。会期中３回、都城発掘調査部史料研究室の研究員によるギャラリートークをおこなった（参加者121名）。また、同じ会場で、都城発掘調査部平城地区（旧・平城宮跡発掘調査部）の創設50周年を記念して、50年間の発掘調査成果を紹介する写真パネル展を同時開催した。会期中の入館者数は16,753名であった。

2013年度　入館者数

飛鳥資料館（有料）観覧料の詳細は65頁	平城宮跡資料館（無料）	合　　計
39,341人	108,896人	148,237人

解説ボランティア事業

平城宮跡への来訪者に対して案内・解説をおこなう「平城宮跡解説ボランティア」事業を1999年10月から実施している。

2014年３月31日現在、所定の研修を受けた解説ボランティアの登録数は144名を数え、平均して一人当たり１ヶ月に２～３日のガイド活動をおこなっている。

2013年度における活動については、定点５ヵ所の解説を中心に、予約受付した来場者への宮跡内ツアーガイドを充実させた。

奈良文化財研究所としては、平城宮跡を広く一般に理解しもらうために、その案内・解説を「平城宮跡解説ボランティア」を通じておこない、その連続する活動を可能にするために、研修機会等の提供等積極的な支援をおこなった。

また、ボランティアガイドの活動をさらに広報し、より多くの方に平城宮跡へお越し頂くようチラシ、機関誌も発行した。

2013年「平城宮跡解説ボランティア」の活動状況（活動日数　307日間）

各定点において解説を受けた来訪者のべ人数							解説をした平城宮跡解説ボランティアの延べ人数
平城宮跡資料館	第一次大極殿	遺構展示館	朱雀門	東院庭園	ツアーガイド	計	
21,514人	25,053人	9,633人	19,672人	7,152人	7,235人	90,259人	3,984人

＊活動は、定点施設の休館日を除く毎日。

2014.3.31現在

図書資料・データベースの公開

〈図書〉

図書資料室では、文化財資料の中核的な拠点となるべく、歴史・考古学分野をはじめ、幅広く文化財関係の書籍および写真資料を収集している。また、仮庁舎図書資料室においても一般公開施設として位置づけて公開しており、所外の研究者および一般の方々に図書・雑誌および展覧会カタログ等の閲覧・複写のサービスをおこなっている。遠隔利用については、国立情報学研究所の提供するNACSIS-ILLを通じて図書の貸し出し、複写サービスを実施している。

また、奈文研の刊行物についても、PDF化をおこない、インターネットを通じて公開している。

公開データベース一覧	2013年度アクセス件数
木簡データベース	19,407
木簡画像データベース	25,664
木簡字典くずし字連携検索	65,561
墨書土器字典	1,860
全国木簡出土遺跡・報告書データベース	950
軒瓦データベース	1,335
遺跡データベース	7,326
古代地方官衙関係遺跡データベース	1,869
古代寺院遺跡データベース	1,869
官衙遺跡整備状況データベース	541
遺跡の斜面保護データベース	1,770
発掘庭園データベース	1,036
Archaeologically Excavated Japanese Gardens	574
OPAC所蔵図書データベース	51,521
報告書抄録データベース	4,034
薬師寺典籍文書データベース	1,074
大宮家文書データベース	448

4 その他

刊行物

奈良文化財研究所　学報

第１冊　仏師運慶の研究（1954）
第２冊　修学院離宮の復元的研究（1954）
第３冊　文化史論叢（1954）
第４冊　奈良時代僧房の研究（1957）
第５冊　飛鳥寺発掘調査報告（1958）
第６冊　中世庭園文化史（1959）
第７冊　興福寺食堂発掘調査報告（1959）
第８冊　文化財論叢Ⅰ（1960）
第９冊　川原寺発掘調査報告（1960）
第10冊　平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告（1961）
第11冊　院の御所と御堂―院家建築の研究―（1962）
第12冊　巧匠安阿弥陀仏快慶（1962）
第13冊　寝殿造系庭園の立地的考察（1962）
第14冊　唐招提寺蔵「レース」と「金亀舎利塔」に関する研究（1962）
第15冊　平城宮発掘調査報告Ⅱ　官衙地域の調査（1962）
第16冊　平城宮発掘調査報告Ⅲ　内裏地域の調査（1963）
第17冊　平城宮発掘調査報告Ⅳ　官衙地域の調査（1966）
第18冊　小堀遠州の作事（1966）
第19冊　藤原氏の氏家とその院家（1968）
第20冊　名物烈の成立（1970）
第21冊　研究論集Ⅰ（1972）
第22冊　研究論集Ⅱ（1974）
第23冊　平城宮発掘調査報告Ⅵ　平城京左京一条三坊の調査（1975）
第24冊　高山―町並調査報告―（1975）
第25冊　平城京左京三条二坊（1975）
第26冊　平城宮発掘調査報告Ⅶ　内裏北外郭の調査（1976）
第27冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ（1976）
第28冊　研究論集Ⅲ（1976）
第29冊　木曽奈良井―町並調査報告―（1976）
第30冊　五條―町並調査の記録―（1977）
第31冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ（1978）
第32冊　研究論集Ⅳ（1978）
第33冊　イタリア中部の一山岳集落における民家調査報告（1978）
第34冊　平城宮発掘調査報告Ⅸ　宮城門・大垣の調査（1978）
第35冊　研究論集Ⅴ（1979）
第36冊　平城宮整備調査報告Ⅰ（1979）
第37冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ（1980）
第38冊　研究論集Ⅵ（1980）
第39冊　平城宮発掘調査報告Ⅹ　古墳時代Ⅰ（1981）
第40冊　平城宮発掘調査報告Ⅺ　第一次大極殿地域の調査（1982）
第41冊　研究論集Ⅶ（1984）
第42冊　平城宮発掘調査報告Ⅻ　馬寮地域の調査（1985）
第43冊　日本における近世民家（農家）の系統的発展（1985）
第44冊　平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告（1986）
第45冊　薬師寺発掘調査報告（1987）
第46冊　平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書（1989）
第47冊　研究論集Ⅷ（1989）
第48冊　年輪に歴史を読む　―日本における古年輪学の成立―（1990）
第49冊　研究論集Ⅸ（1991）
第50冊　平城宮発掘調査報告書XIII　内裏の調査Ⅱ（1991）
第51冊　平城宮発掘調査報告書XIV　平城宮第二次大極殿院の調査（1993）
第52冊　西隆寺発掘調査報告書（1993）
第53冊　平城宮朱雀門の復原的研究（1994）
第54冊　平城京左京二条二坊・三条二坊　―長屋王邸・藤原麻呂邸―発掘調査報告（1995）
第55冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ　―飛鳥水落遺跡の調査―（1995）
第56冊　平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告（1997）
第57冊　日本の信仰遺跡（1999）
第58冊　研究論集Ⅹ（1999）
第59冊　中世瓦の研究（2000）
第60冊　研究論集Ⅺ（1999）
第61冊　研究論集Ⅻ（2001）
第62冊　史跡頭塔発掘調査報告（2001）
第63冊　山田寺発掘調査報告　本文編　図版編（2002）
第64冊　研究論集XIII（2002）
第65冊　文化財論叢Ⅲ　奈良文化財研究所　創立五十周年記念論文集（2002）

第66冊　研究論集XIV（2003）
第67冊　平城京左京二条二坊十四坪発掘調査報告
旧石器時代編［法華寺南遺跡］（2003）
第68冊　吉備池廃寺発掘調査報告
百済大寺跡の調査（2003）
第69冊　平城宮発掘調査報告XV
東院庭園地区の調査（2003）
第70冊　平城宮発掘調査報告XVI
兵部省地区の調査（2005）
第71冊　飛鳥池遺跡発掘調査報告Ⅰ（2004）
第72冊　奈良山発掘調査報告Ⅰ
石のカラト古墳・音乗谷古墳の調査（2005）
第73冊　タニ窯跡A6号窯跡発掘調査報告書（2005）
第74冊　古代庭園研究Ⅰ（2006）
第75冊　研究論集XV（2006）
第76冊　法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告（2007）
第77冊　日韓文化財論集Ⅰ（2008）
第78冊　近世瓦の研究（2008）
第79冊　平城宮第一次大極殿の復原に関する研究Ⅰ
基壇・礎石（2009）
第80冊　平城宮第一次大極殿の復原に関する研究Ⅳ
瓦・屋根（2009）
第81冊　平城宮第一次大極殿の復原に関する研究Ⅱ
木部（2010）
第82冊　平城宮第一次大極殿の復原に関する研究Ⅲ
彩色・金具（2010）
第83冊　研究論集16（2010）
第84冊　平城宮発掘調査報告XVII
第一次大極殿院地区の調査２　本文編/図版編（2011）
第85冊　漢長安城桂宮　報告編・論考編（2011）
第86冊　研究論集17
平安時代庭園の研究―古代庭園研究Ⅱ―（2011）
第87冊　日韓文化財論集Ⅱ（2011）
第88冊　西トップ遺跡調査報告
―アンコール文化遺産保護共同研究報告書―（2011）
第89冊　四万十川流域　文化的景観研究（2011）
第90冊　Western Prasat Top Site Survey Report on Joint Research for the Protection of the Angkor Historic Site（2012）
第91冊　遼寧省朝暘地区隋唐墓の整理と研究（2012）
第92冊　文化財論叢Ⅳ（2012）

奈良文化財研究所　史料

第１冊　南無阿弥陀仏作善集（複製）（1955）
第２冊　西大寺叡尊伝記集成（1956）
第３冊　仁和寺史料 寺誌編Ⅰ（1964）
第４冊　俊乗坊重源伝記集成（1955）
第５冊　平城宮木簡一　図版（1966）
解説（1969）
（平城宮跡発掘調査報告Ⅴ）
第６冊　仁和寺史料　寺誌編２（1968）
第７冊　唐招提寺史料Ⅰ（1971）
第８冊　平城宮木簡二 図版（1975）解説（1975）
（平城宮跡発掘調査報告Ⅷ）
第９冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅰ（1975）
第10冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅱ（1976）
第11冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅲ（1977）
第12冊　藤原宮木簡一　図版・解説（1978）
第13冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅳ（1978）
第14冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅴ（1979）
第15冊　東大寺文書目録第１巻（1979）
第16冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅵ（1979）
第17冊　平城宮木簡三（1981）
第18冊　藤原宮木簡二（1981）
第19冊　東大寺文書目録第２巻（1981）
第20冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅶ（1980）
第21冊　東大寺文書目録第１巻（1981）
第22冊　七大寺巡礼私記（1982）
第23冊　東大寺文書目録第４巻（1982）
第24冊　東大寺文書目録第５巻（1983）
第25冊　平城宮出土墨書土器集成Ⅰ（1983）
第26冊　東大寺文書目録第６巻（1984）
第27冊　木器集成図録―近畿古代編―（1985）
第28冊　平城宮木簡四（1986）
第29冊　興福寺典籍文書目録第1巻（1986）
第30冊　山内清男考古資料１（1988）
第31冊　平城宮出土墨書土器集成Ⅱ（1988）
第32冊　山内清男考古資料２（1989）
第33冊　山内清男考古資料３（1992）
第34冊　山内清男考古資料４（1992）
第35冊　山内清男考古資料５（1992）
第36冊　木器集成図録―近畿原始編―（1993）
第37冊　梵鐘実測図集成（上）（1993）
第38冊　梵鐘実測図集成（下）（1993）
第39冊　山内清男考古資料６（1993）
第40冊　山田寺出土建築部材集成（1995）
第41冊　平城京木簡一（1995）
第42冊　平城宮木簡五（1996）

第43冊　山内清男考古資料７（1996）
第44冊　興福寺典籍文書目録第２巻（1996）
第45冊　北浦定政関係資料（1997）
第46冊　山内清男考古資料８（1997）
第47冊　北魏洛陽永寧寺（1998）
第48冊　発掘庭園資料（1998）
第49冊　山内清男考古資料９（1998）
第50冊　山内清男考古資料10（1999）
第51冊　山内清男考古資料11（2000）
第52冊　地域文化財の保存修復　考え方と方法（2000）
第53冊　平城京木簡二　長屋王家木簡二（2001）
第54冊　山内清男考古資料12（2000）
第55冊　法隆寺古絵図集（2001）
第56冊　法隆寺考古資料（2002）
第57冊　日中古代都城図録（2002）
第58冊　山内清男考古資料13（2002）
第59冊　平城宮出土墨書土器集成Ⅲ（2003）
第60冊　平城京条坊総合地図（2003）
第61冊　鞏義黄冶唐三彩（2003）
第62冊　北浦定政関係資料
　　松の落ち葉一（2003）
第63冊　平城宮木簡六（2004）
第64冊　平城京出土古代官銭集成Ⅰ（2004）
第65冊　北浦定政関係資料
　　松の落ち葉二（2004）
第66冊　山内清男考古資料14（2004）
第67冊　興福寺典籍文書目録第３巻（2004）
第68冊　古代東アジアの金属製容器Ⅰ中国編（2004）
第69冊　平城京漆紙文書（一）（2004）
第70冊　山内清男考古資料15（2005）
第71冊　古代東アジアの金属製容器２　朝鮮・日本編
　　（2005）
第72冊　畿内産土師器集成西日本編（2005）
第73冊　黄冶唐三彩窯の考古新発見（2006）
第74冊　山内清男考古資料16（2006）
第75冊　平城京木簡三　二条大路木簡１（2006）
第76冊　評制下荷札木簡集成（2006）
第77冊　平城京出土陶硯集成Ⅰ（2006）
第78冊　黒草紙・新黒双紙（2007）
第79冊　飛鳥藤原京木簡一　図版・解説（2007）
第80冊　平城京出土陶硯集成二 平城京・寺院（2007）
第81冊　高松塚古墳壁画フォトマップ資料（2009）
第82冊　飛鳥藤原京木簡二 図版・解説（2009）
第83冊　興福寺典籍文書目録（2009）
第84冊　山内清男考古資料17（2009）
第85冊　平城宮木簡七　図版・解説（2010）
第86冊　キトラ古墳壁画フォトマップ資料（2011）
第87冊　明治時代平城宮跡保存運動史料集（2011）
第88冊　藤原宮木簡三　図版・解説（2012）
第89冊　仁和寺史料　古文書編一（2013）
第90冊　大宮家文書調査報告書（2014）

奈良文化財研究所　研究報告

第１冊　文化的景観研究集会（第１回）報告書（2009）
第２冊　河南省鞏義市黄冶窯跡の発掘調査概要（2010）
第３冊　古代東アジアの造瓦技術（2010）
第４冊　古代官衙・集落研究会報告書「官衙と門」報告編／資料編（2010）
第５冊　文化的景観研究集会（第２回）報告書（2010）
第６冊　古代官衙・集落研究会報告書「官衙・集落と鉄」（2011）
第７冊　文化的景観研究集会（第３回）報告書（2011）
第８冊　鞏義白河窯の考古新発見（2011）
第９冊　古代官衙・集落研究会報告書「四面廂建物を考える」報告編／資料編（2012）
第10冊　文化的景観研究集会（第４回）報告書（2012）
第11冊　河南省鞏義市白河窯跡の発掘調査（2012）
第12冊　奈良文化財研究所研究報告書「塩の生産・流通と官衙・集落」（2013）
第13冊　文化的景観研究集会（第5回）報告書（2013）

奈良文化財研究所　基準資料

第１冊　瓦編１　解説（1974）
第２冊　瓦編２　解説（1975）
第３冊　瓦編３　解説（1976）
第４冊　瓦編４　解説（1977）
第５冊　瓦編５　解説（1977）
第６冊　瓦編６　解説（1979）
第７冊　瓦編７　解説（1980）
第８冊　瓦編８　解説（1981）
第９冊　瓦編９　解説（1984）

飛鳥資料館　図録

第１冊　飛鳥白鳳の在銘金銅仏（1976）
第２冊　飛鳥白鳳の在銘金銅仏　銘文編（1977）
第３冊　日本古代の墓誌（1977）
第４冊　日本古代の墓誌　銘文編（1978）
第５冊　古代の誕生仏（1978）
第６冊　飛鳥時代の古墳―高松塚とその周辺―（1979）
第７冊　日本古代の鴟尾（1980）
第８冊　山田寺展（1981）
第９冊　高松塚拾年（1982）

第10冊　渡来人の寺―桧隈寺と坂田寺―（1983）
第11冊　飛鳥の水時計（1983）
第12冊　小建築の世界―埴輪から瓦塔まで―（1984）
第13冊　藤原―半世紀にわたる調査と研究―（1984）
第14冊　日本と韓国の塑像（1985）
第15冊　飛鳥寺（1985）
第16冊　飛鳥の石造物（1986）
第17冊　萬葉乃衣食住（1987）
第18冊　壬申の乱（1987）
第19冊　古墳を科学する（1988）
第20冊　聖徳太子の世界（1988）
第21冊　仏舎利埋納（1989）
第22冊　法隆寺金堂壁画飛天（1989）
第23冊　日本書紀を掘る（1990）
第24冊　飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察（1991）
第25冊　飛鳥の源流（1991）
第26冊　飛鳥の工房（1992）
第27冊　古代の形（1995）
第28冊　蘇我三代（1995）
第29冊　斉明紀（1996）
第30冊　遺跡を測る（1997）
第31冊　それからの飛鳥（1998）
第32冊　UTAMAKURA（1998）
第33冊　幻のおおでら―百済大寺（1998）
第34冊　鏡を作る　海獣葡萄鏡を中心として（1999）
第35冊　あすかの石造物（2000）
第36冊　飛鳥池遺跡（2000）
第37冊　遺跡を探る（2001）
第38冊　‘あすか―以前’（2002）
第39冊　A0の記憶（2002）
第40冊　古年輪（2003）
第41冊　飛鳥の湯屋（2004）
第42冊　古代の梵鐘（2004）
第43冊　飛鳥の奥津城―キトラ・カラト・マルコ・高松塚（2005）
第44冊　東アジアの古代苑池（2005）
第45冊　キトラ古墳と発掘された壁画たち（2006）
第46冊　キトラ古墳壁画四神玄武（2007）
第47冊　奇偉荘厳山田寺（2007）
第48冊　キトラ古墳壁画十二支―子・丑・寅―（2008）
第49冊　まぼろしの唐代精華―黄冶唐三彩窯の考古新発見―（2008）
第50冊　キトラ古墳壁画四神―青龍白虎―（2009）
第51冊　三燕文化の考古新発見―北方騎馬民族のかがやき―（2009）
第52冊　キトラ古墳壁画四神（2010）
第53冊　木簡黎明―飛鳥に集ういにしえの文字たち―（2010）
第54冊　星々と日月の考古学（2011）
第55冊　飛鳥遺珍―のこされた至宝たち―（2011）
第56冊　比羅夫がゆく―飛鳥時代の武器・武具・いくさ―（2012）
第57冊　花開く都城文化（2012）
第58冊　飛鳥寺2013（2013）
第59冊　飛鳥・藤原京への道（2013）

飛鳥資料館　カタログ

第１冊　仏教伝来飛鳥への道（1975）
第２冊　飛鳥の寺院遺跡１―最近の出土品（1975）
第３冊　飛鳥の仏像（1978）
第４冊　桜井の仏像（1979）
第５冊　高取の仏像（1980）
第６冊　橿原の仏像（1981）
第７冊　飛鳥の王陵（1982）
第８冊　大官大寺 ―飛鳥最大の寺―（1985）
第９冊　高松塚の新研究（1992）
第10冊　飛鳥の一と―最近の調査から―（1994）
第11冊　山田寺（1996）
第12冊　山田寺東回廊再現（1997）
第13冊　飛鳥のイメージ（2001）
第14冊　古墳を飾る（2005）
第15冊　うずもれた古文書 ―みやこの漆紙文書の世界―（2006）
第16冊　飛鳥の金工海獣葡萄鏡の諸相（2006）
第17冊　飛鳥の考古学2006（2007）
第18冊　「とき」を撮す―発掘調査と写真―（2007）
第19冊　飛鳥の考古学2007（2008）
第20冊　飛鳥の考古学2008（2009）
第21冊　飛鳥の考古学2009（2010）
第22冊　小さな石器の大きな物語（2010）
第24冊　木簡黎明―飛鳥に集ういにしえの文字たち―（2010）
第24冊　飛鳥の考古学2010（2011）
第25冊　鋳造技術の考古学―東アジアにひろがる鋳物師のわざ―（2011）
第26冊　飛鳥の考古学2011（2012）
第27冊　飛鳥の考古学2012（2013）
第28冊　飛鳥・藤原京を考古科学する（2013）
第29冊　キトラ古墳壁画発見30周年記念　白虎　玄武　朱雀　青龍（2014）
第30冊　飛鳥の考古学2013（2014）

その他の刊行物（2013年度）

・奈良文化財研究所紀要2013
・奈文研ニュースNo.49
・奈文研ニュースNo.50
・奈文研ニュースNo.51
・奈文研ニュースNo.52
・埋蔵文化財ニュースNo.154
・埋蔵文化財ニュースNo.155
・埋蔵文化財ニュースNo.156
・埋蔵文化財ニュースNo.157
・平城宮発掘出土木簡概報（四十三）
・平城京どうぶつえん―天平びとのアニマルアート―
・地下の正倉院展―木簡学ことはじめ―
・薬師寺旧境内保存整備計画にともなう発掘調査概報Ⅱ
・東大寺図書館所蔵新修東大寺文書聖教調査報告書
・遺跡出土金銅装大刀の中村純一寄贈文書調査研究
・奈良文化財研究所創立六〇周年記念講演『遺跡をさぐり、しらべ、いかす―奈文研六〇年の軌跡と展望』講演録
・奈良文化財研究所創立六〇周年記念日中韓国際講演会『日中韓古代都城文化の潮流―奈文研六〇年都城の発掘と国際共同研究』講演録
・『日光二荒山神社中宮祠宝物館蔵鏡』
・飛鳥資料館研究図録第17冊
・『第５回日中韓建築文化遺産保存国際学術会議予稿集』
・『国宝・重要文化財建造物写真乾板目録Ⅵ』
・『重要文化財建造物現状変更説明1931～1949』
・『日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究』
・『パブリックな存在としての遺跡・遺産』平成24年度遺跡等マネジメント研究集会（第２回）報告書
・『室町時代の将軍の庭園』平成25年度庭園の歴史に関する研究会報告書
・『８世紀の瓦づくりⅢ　―平城宮式軒瓦の展開１6225-6663系』第14回シンポジウム予稿集
・『古代瓦研究Ⅵ　―大官大寺式・興福寺式・鴻臚館式軒瓦の展開―、―重圏文系軒瓦の展開―』
・第17回古代官衙・集落研究会研究資料
・『長舎と官衙の建物配置』第17回 古代官衙・集落研究報告資料
・『唐招提寺授戒帳』
・『西トップ遺跡調査修復中間報告南祠堂解体編』

人事異動（2013. 4. 1～2014. 3. 31）

●2013年４月１日付け

副所長（兼）都城発掘調査部長　小野健吉
研究支援推進部研究支援課長　今西康益
研究支援推進部総務課課長補佐　村上加代子
研究支援推進部総務課課長補佐　木村浩二
（兼）総務課財務係長
研究支援推進部連携推進課課長補佐　松本正典
（兼）連携推進課広報企画係長
研究支援推進部研究支援課専門職員　本光秀明
研究支援推進部研究支援課施設係長　岩田真一
研究支援推進部研究支援課宮跡等活用支援係長
江川正
研究支援推進部総務課財務係　高梨泰裕
企画調整部長　杉山洋
（兼）企画調整部写真室長
文化遺産部長　林良彦
（兼）文化遺産部建造物研究室長
（兼）文化遺産部遺跡整備研究室長
都城発掘調査部副部長　玉田芳英
（兼）都城発掘調査部考古第二研究室長
埋蔵文化財センター長　難波洋三
（兼）埋蔵文化財センター環境考古学研究室長
企画調整部企画調整室長　加藤真二
（兼）企画調整部展示企画室長
飛鳥資料館学芸室長　石橋茂登
文化遺産部主任研究員　中島義晴
文化遺産部建造物研究室研究員　鈴木智大
文化遺産部遺跡整備研究室研究員　高橋知奈津
都城発掘調査部考古第一研究室研究員
和田一之輔
都城発掘調査部考古第二研究室研究員
大澤正吾
都城発掘調査部遺構研究室研究員　大林潤
都城発掘調査部遺構研究室研究員　前川歩
研究支援推進部連携推進課アソシエイトフェロー
髙田祐一
都城発掘調査部考古第一研究室アソシエイトフェロー
山野ケン陽次郎
都城発掘調査部考古第三研究室アソシエイトフェロー
南部裕樹

●2013年４月26日付け

（兼）埋蔵文化財センター年代学研究室長
難波洋三

●2013年5月1日付け

文化遺産部遺跡整備研究室アソシエイトフェロー
大　平　和　弘

●2013年7月1日付け

研究支援推進部長　上　田　浩　司

●2013年8月31日付け

任期満了退職　辻　本　與志一

●2013年9月1日付け

都城発掘調査部遺構研究室アソシエイトフェロー
村　山　聡　子

●2013年9月30日付け

任期満了退職　井　上　　幸
辞　　職　大　平　和　弘

●2013年10月1日付け

都城発掘調査部史料研究室アソシエイトフェロー
方　　国　花
都城発掘調査部史料研究室アソシエイトフェロー
井　上　　幸

●2013年10月14日付け

辞　　職　山野ケン陽次郎

●2014年2月15日付け

任期満了退職　成　田　　聖

●2014年3月31日付け

任期満了退職　井　上　麻　香
辞　　職　小　澤　　毅
辞　　職　渡　辺　丈　彦
辞　　職　荒　田　敬　介
辞　　職　児　島　大　輔
辞　　職（転出）　黒　坂　貴　裕
辞　　職（転出）　村　上　加代子
辞　　職（転出）　岩　田　真　一
研修終了　三　好　勇　太

予算等

予算（予定額）

単位：千円

	2013年度	2014年度（予算額）
文部科学省からの運営費交付金（人件費を除く）	868,907	825,444
施設整備費	2,530,965	2,808,365
自己収入（入場料等）	34,983	34,983
計	3,434,855	3,668,792

土地と建物

単位：㎡

	土　地	建 物（建面積／延面積）	建築年
本館地区	8,860.13	現在、建替中	
平城宮跡資料館地区	※	13,328.49/21,394.61	1970年他
都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）	20,515.03	6,016.41/9,477.43	1988年他
飛鳥資料館地区	17,092.93	2,657.30/4,403.50	1974年他

※平城宮跡資料館地区の土地は文化庁所属の国有地を無償使用

科学研究費助成事業（2014年4月5日現在）

単位：千円

研 究 種 目	2013年度				（参考）2014年度			
	科学研究費補助金		学術研究助成基金助成金		科学研究費補助金		学術研究助成基金助成金	
	件　数	金　額	件　数	金　額	件　数	金　額	件　数	金　額
基盤研究（S）	1	32,500	–	–	1	46,540	–	–
基盤研究（A）	3	27,950	–	–	3	36,920	–	–
基盤研究（B）	7	16,770	5	13,260	8	16,900	8	13,520
基盤研究（C）	1	1,040	7	9,620	–	–	7	8,710
挑戦的萌芽研究	–	–	–	–	–	–	1	1,560
若手研究（A）	2	2,210	1	1,950	3	4,550	2	3,380
若手研究（B）	1	650	14	15,405	–	–	18	18,720
研究活動スタート支援	1	1,040	–	–	1	910	–	–
奨励研究	2	1,200	–	–	–	–	–	–
特別研究員奨励費	1	764	–	–	1	436	–	–

受託調査研究

単位：千円

区　分	2012年度		2013年度	
	件　数	金　額	件　数	金　額
研　究	36	224,118	18	186,599
発　掘	8	95,547	13	107,975
計	44	319,665	41	294,574

研究助成金

単位：千円

研究助成金	2012年度		2013年度	
	件　数	金　額	件　数	金　額
	9	5,664	9	7,090

※採択年による集計
※二ヵ年にわたる場合も初年度に計上

職員一覧

2014年4月1日現在

※(平):平城地区
(藤):飛鳥・藤原地区
(担):地区担当
(育):育児休業中
(兼):兼務

- 所長 松村恵司
- 副所長 小野健吉
  - 研究支援推進部長 上田浩司
    - 総務課長 石澤　剛
      - 課長補佐 南　幸一
        - 総務係長 桑原隆佳
      - 課長補佐 木村浩二
        - 財務係長 (兼)木村浩二
          - 主任 中野留美子、松本直也
          - 係員 高梨泰裕
    - 連携推進課長 田中康成
      - 課長補佐 松本正典
        - 経営戦略係長
          - 主任 高田幸恵
          - 係員 (育)真嶋明奈
        - 広報企画係長 (兼)松本正典
      - 課長補佐 渡　勝弥
        - 文化財情報係長 (兼)渡　勝弥
      - 課長補佐 車井俊也
        - 専門職員(飛鳥・藤原地区担当) 米野元則
    - 研究支援課長 今西康益
      - 宮跡等活用支援係長 江川　正
        - 係員 三本松俊徳
      - 施設係長 水田康介
      - 専門職員 本光秀明
  - 企画調整部長 杉山　洋
    - 企画調整室長 加藤真二
    - 文化財情報研究室長 (兼)森本　晋
    - 国際遺跡研究室長 森本　晋
      - 研究員 (兼)田村朋美
      - アソシエイトフェロー 田代亜紀子
      - 研究補佐員 佐藤由似
    - 展示企画室長 (兼)加藤真二
      - 研究員 西田紀子／丹羽崇史、中川あや
      - アソシエイトフェロー 渡邉淳子
    - 写真室長 (兼)杉山　洋
      - 再雇用職員 (藤)井上直夫
      - 主任 中村一郎、(藤)栗山雅夫
        - 技術職員
        - 技能補佐員 鎌倉　綾
    - 主任研究員 石村　智
  - 文化遺産部長 林　良彦
    - 歴史研究室長 吉川　聡
    - 建造物研究室長 (兼)林　良彦
      - 研究員 海野　聡
    - 景観研究室長 平澤　毅
      - 研究員 恵谷浩子
      - アソシエイトフェロー 菊地淑人
    - 遺跡整備研究室長 (兼)林　良彦
      - 研究員 (育)高橋知奈津
    - 主任研究員 中島義晴
  - (兼)都城発掘調査部長 小野健吉 (担:平城)
    - 考古第一研究室長 (藤)(兼)玉田芳英
      - 研究員 (平)庄田慎矢／芝康次郎、(藤)和田一之輔／諫早直人
    - 考古第二研究室長 (平)尾野善裕
      - 研究員 (平)小田裕樹、(藤)若杉智宏／大澤正吾
      - アソシエイトフェロー (藤)大谷育恵
    - 考古第三研究室長 (藤)清野孝之
      - 研究員 (平)石田由紀子／川畑　純、(藤)森先一貴
      - アソシエイトフェロー (平)中川二美、(藤)南部裕樹
    - 史料研究室長 (平)渡邉晃宏
      - 研究員 (平)山本祥隆、(藤)桑田訓也
      - アソシエイトフェロー (平)井上　幸、(藤)方　国花
    - 遺構研究室長 (平)箱崎和久
      - 研究員 (平)鈴木智大／番　光、(藤)大林　潤／前川　歩
      - アソシエイトフェロー (平)中島咲紀、(平)松下迪生、(平)村山聡子
    - 主任研究員 (平)馬場　基／神野　恵／今井晃樹／青木　敬、(藤)西山和宏／降幡順子／山本　崇／森川　実／廣瀬　覚
    - 専門職員 (藤)(兼)米野元則
  - 都城発掘調査部副部長 玉田芳英 (担:藤原)
  - 埋蔵文化財センター長 難波洋三
    - 保存修復科学研究室長 髙妻洋成
      - 研究員 脇谷草一郎／田村朋美、(兼)降幡順子
      - アソシエイトフェロー 赤田昌倫
    - 環境考古学研究室長 (兼)難波洋三
      - 研究員 山﨑　健
    - 年代学研究室長 (兼)難波洋三
      - 研究員 星野安治
    - 遺跡・調査技術研究室長 小池伸彦
    - 主任研究員 金田明大／大河内隆之
  - 飛鳥資料館長 (兼)松村恵司
    - 学芸室長 石橋茂登
      - 研究員 (兼)西田紀子／(兼)丹羽崇史
    - 庶務担当室長 (命)車井俊也